

095007-000-3

特9-628

花夜叉

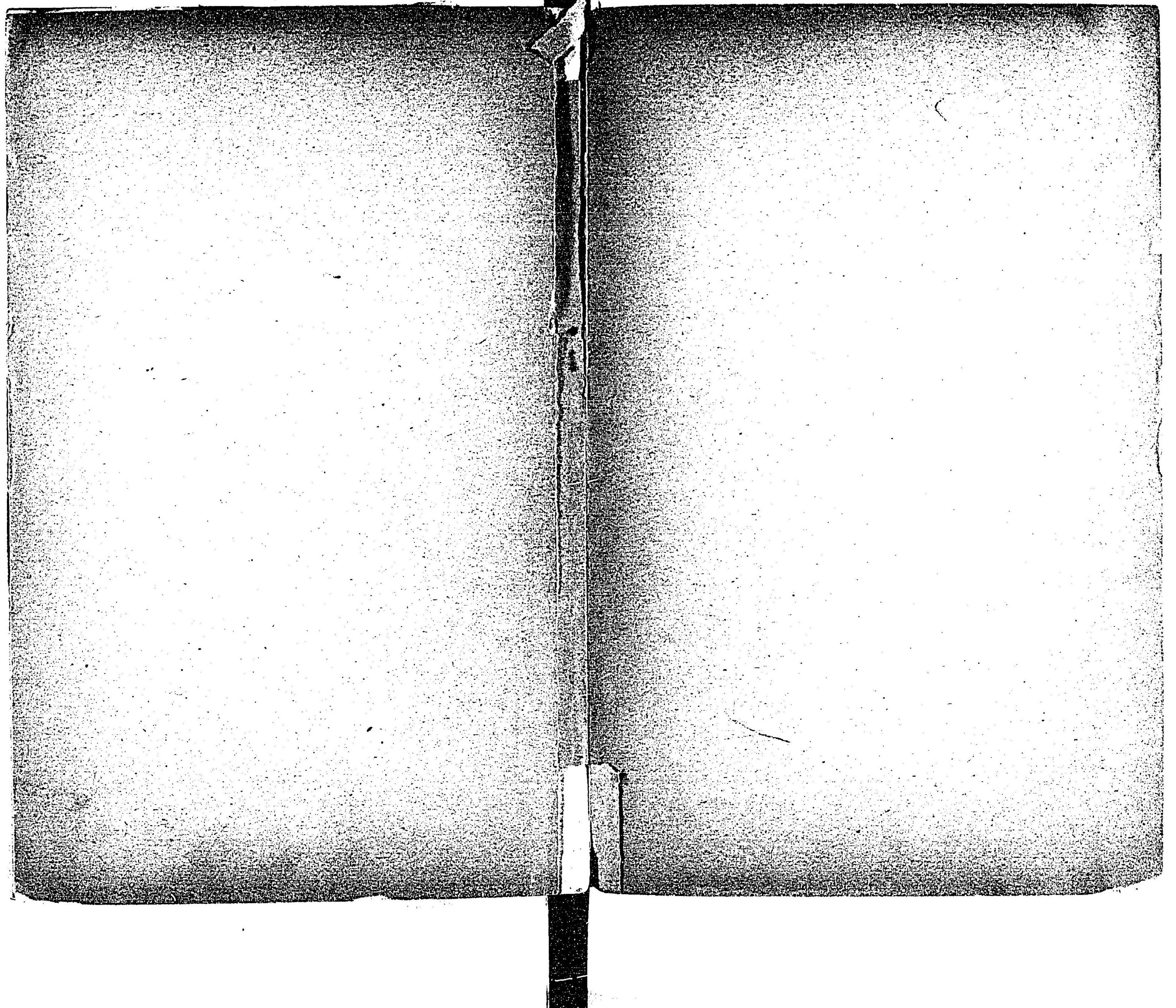
渡辺 霞亭/著

M39

DBQ-2603



251
338

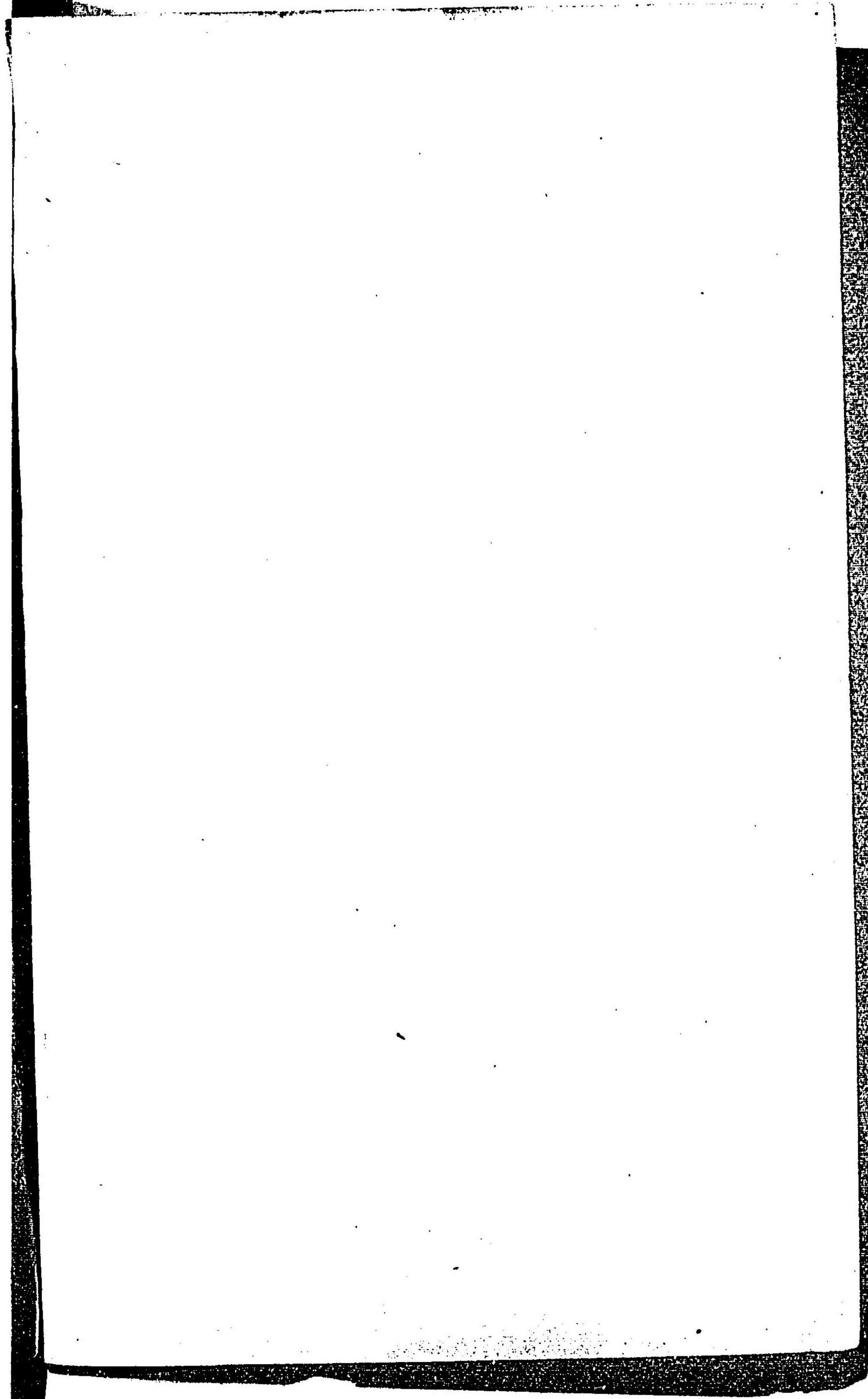




又

黑
法
師
著







読書
の
静けさ

花
夜
叉

黒
法
師
著

又 夜 花

「あらお嬢様、何を遊ばすのでございますよ、そ、そんな御短氣な事を遊ばしちや」
乳母のお松は辛うじて、龍子の手に握られて居た一婦人の寫眞をもぎ取つた、龍子は
片手に鋭い洋刀を持つて、その寫眞の胸許を刺し貫くべく身を構へた處であつた。

「……まアお止し遊ばせよ、お不憫さうに……」と乳母は寫眞を懐に挿と抱いた。龍
子は不平さうに乳母の顔を睨み付けたがその眼の中から熱い涙がほと／＼流れた。乳
母は袖の間で、密と寫眞を出して見て、

「お嬢さま、このお寫眞は木田のお嬢様ぢやございませんか、あなたとお厚情の……
花江様ぢやございませんか」

「いゝえ」と龍子は頭を掉つて「木田の嬢さんなら好いけれど……もう木田の嬢さんぢ

(一)

や無くつてよ、高窓に結て在らッしやるそのお髪が今は！今は！」と聲を機ませた。
 「谷口様の爲に、丸鬘に結て在らッしやると被仰るのでございますか」
 「私、谷口の奥さんが憎いのよ、憎くてくその美しい顔に熱湯を浴びせて遣りたいのよ」

龍子は年紀十八九でもあらう、脊のすらりと高い、髪のおつくりと濃い、中肉の、色白の、眼の愛嬌の何んとも云へぬ、口許の締りの好い、鼻の高い、撫肩の美人であるそれが今日は其の愛嬌のある眼に血走つて菫色の頬は土の色よりも蒼く、富士額に亂れかゝつた短い髪が、宛ら逆立ちでもして居るかのやうに物凄う。

「そんな事を被仰るものではございませぬ、私、あなたのお心は熱く察して居ますけれど、ナニあなた、殿方が谷口様に限つたものでは無し、世間は廣いのでございますもの、谷口様よりお學問もお在んなさる御身分もおあんなさる、好い殿方がいくらもあるぢやございませぬか、此の事については金次郎も心配して居りますから、私共夫婦にお任せなさいまし、決してあなたのお悪いやうには致しませぬ」

「いえ、お前や金次郎が何と云つて呉れても、私の心は慰みませぬ、私は谷口さんを

失つたのを悲しむのぢや無い、花江さんが私と谷口さんとの關係を知つて居ながら、私を出しぬいて、谷口さんの……谷口さんの……」

「それは熱く分つて居ります、お嬢様のお怨みは私ども、お察し申して居ります、けれどもお儀式も済んで、谷口様の御夫人とお決り遊ばしたのでございますから、此の上どう致さうにも……致し方が無いぢや……ございませぬ……」

「致し方の無いやうに誰が爲た！、私が金次郎に懇々頼んで居るのを、捨てといつてうにも斯うにも取り返しが付かないやうにしたんぢやないか、金次郎は私の利益を守護して居るなんて口癖に云ふけれど、私を殺すんだ！いえ、私を殺すんだ！」

「まあ些と氣をお鎮めなさいまし、あなた今感情に制せられて在らッしやる、私共夫婦が、なんでお嬢さまの事を……」

「いえ、聽かな」

「悪く致すやうな」

「いえ聞かない」

「そんな不忠なことを……」

「聞かないく、どうしたつて聞くものか」

(三)

「まアお嬢様」とお松は憫た面をして「何故そんな事を被仰るのでございます」
 龍子は急にさし垂頭して、ほろ／＼涙を流すのであつた、彼の女は初この戀人を、お
 友達の花江に横取せられたので、これが心底から口惜しいのであつた。
 お松はお嬢様のこの失望を、慰める詞が無い。
 龍子は父母も無く同胞も無き一本立の女主であつた、父の南小路利宗はさる公卿華族
 の分家で、全體ならば男爵にも叙せらるべき家柄であるが、どういふものか平民で居
 る、平民では居るが中年から蓄財に心を傾けたので、四十八歳で死ぬる時には十數萬
 圓の財産を有て居た、華族になつて貧乏で暮らすよりも、平民で金を有た方が、どん
 なに好いかも知れぬといふのが、利宗の生前の抱負であつた。
 身の皮を剥ぐやうにして貯めた金も、いざ棺桶へ足を入れる時は、それを藏すべきボ
 ケットが無い、利宗の死亡後は、譜代の家人であつた岸澤金次郎が内外の料理をする

妻のお松は龍子に乳を與へた緣故で、奥間の事一切を取り扱ふ、それで龍子は親が無
 うても同胞が無うても、何一つ不自由を感じず、物淋しいと思はず、人に勝れて學
 問もし、人に勝れて遊藝も仕込まれ、人に勝れて氣高うも育てられ、人に勝れて恠澁
 でもあつたから、當時京都の上京中で第一の美人はといふと、まづ龍子に指を屈する
 第一の女はといふと、又龍子に指を屈する妙齡の婦人で第一の金満家はといふと、是
 れも又龍子に指を屈せねばならぬ。然し龍子は、十數萬圓の財産を相續したのも、上
 京中の美人才女と呼ばれるのも、戀人を失つては何んの樂みも無い、谷口健吉は龍子
 の命であつた、龍子のお日様であつた、さうして更に龍子の精神であつた。
 龍子と健吉とは小學校時代からの友達で、互に深く心の中を語り合つて居た、健吉が
 文科大學を卒業したと聞いた時、龍子はいかに歡んだであらうか、健吉が文學士の稱
 號を戴いて、花々しく京都へ歸つた時、龍子はいかに歡んだであらうか。
 然も彼の女は、その命を奪られた、そのお日様を奪られた、その精神を奪られた、そ
 れも一番お交情好しであつた木田の花江に。
 龍子が花江を憎むのも無理は無い、世界の總ての女子婦人を、禽獸にも劣つた物と思

ひ癖むに至つたのも無理はない、花江の寫眞を突き刺して、世界の女を阻はうと覺悟したる無理はない。

お松は心配さうに「お嬢様、ちつとお庭でも御散歩遊ばしてはいかゞでございます、花壇の菊が賊に善く咲いて居りますよ」

何かな心を慰めるやうに云つたが、龍子は頭をふるのみであつた。

「私、何を見たとつて楽しくは感じないの」

「けれど又お氣の慰む時がありますよ、それにおそよもう参る筈でございます」

おそよといふは龍子の乳姉妹で、お松と金次郎との間に擧きた一粒種であつた。

それも龍子は頭を掉つた「おそよにも逢ひたくない、女の方には誰も逢ひたくない私

は月も花も何んにも要らない、山の奥へでも入つてしまひたいのだわ」

(三)

初恋に失敗した龍子は、女を恐いもの、世を恐いもの、人は頼みにならぬ者と信じて了つた、その反動であるか否かは分らぬが、遂には家の財産をも頼みにせぬやうに

なつたのである、人でさへ頼みにならぬ程であるから、勿論財産の頼みになる筈はない、こゝに幾百千萬圓の金があらうとも、その身の失つた戀を買ふことは能きぬ、自分の迷がした望みを呼び戻すことは能きぬ。

世も憎い、女も憎い、金も憎い、物も憎い、然し女の身で世をどうすることも能きぬ、

毎朝東から出る太陽を黒うすることも、春秋の時を異へず美しく咲く花を醜うすることも、生きて居る女を穴埋にする事も、人間の力ではとても能きぬ、この不自由な世

に、少しでも自由にする事の出来るは自分の有て居る金ばかりである、自分の財産は

泥溝へ捨てやうが、川へ沈めやうが、誰も點の打ち人は無い。

龍子は世を不平に思ふ餘り、親譲りの財産を、せつせと人に施すことを始めた、尤も

女には一人も遣らぬが、男ならば誰にでも遣る、乞丐でも穢多でも、書生でも車夫で

も。

甘い物の落て居る處へは、何處からとも蟻が集まつて来るやうに、只で貰へる金のある處へは、何處からとも無く墮落書生が寄つて来る、龍子の家の門前へ、羽織を着て洋杖をついて、何かといふと漢語を遣ひたがる乞丐の二組三組來ぬことは無い。

それに向つて龍子は「一々金を遣る、事情の如何に拘らず、いつでもきつと金を遣る、金次郎は折々苦い顔をするが、乳母のお松はその無限の善行を徳憑めるやうに「ほん」とにあなたは大功徳を施して在らつしやるわ、あなたのお遣はしになるそのお金で、どの位の人が助かるかも知れませんよ」と云ひ立てた。

然し龍子は之を歡ぶので無い、歡んで金を施すのでは無い、この一種の慈恵金で、心の不平の幾分を慰めやうとするのだ。

「御免下さい、御免下さい」

今日も又鳥打帽を被つた乞丐が來た、執次に出たのは金次郎の次に居る事務員であつた、

「何んの御用ですか」と聞くと、

「お嬢さんはお宅ですか、我々は一寸お願ひがあつて來たものです」
然る大の男が三人づれ。

事務員は總て善く心得て居る。

「お嬢様は御勉強中で在らつしやるから、御來意は私から申し上げる、御用と被仰る

のはお金の御無心ですかね」

「はい、お察しの通り、我々三人聊かの金子に詰つて、殆ど執達吏のお見舞ひを受けやうとして居るのです、ですから……」

「事情を承る必要はありません、まづ金高を被仰い」

「えい、その我々は富小路に或る商事會社を設けて最も有利なる業に従つて居るもので、こゝでそのお嬢様の……」

「事情は聞くに及びません、いくら欲しいと被仰るのですか」

「えい、その實は……」と一人は云ひ淀んだ。

すると一人が「誠に申し難ねますが、三人の頭へ八百圓だけ……」

「八百圓！」

「少し多くてお氣の毒ですが、一應お嬢様へお傳へを願ひます」
乞丐にしては些と金高が多過ぎる。

金次郎は特性の嚴しい面を、龍子の前へ突き出した、龍子は氣高い愛嬌の無い眼元にこの無口の朴訥の忠義者をきつと睨んだ、側でお松は押繪の下圖を付けて居る。

金次郎は口を尖らせて「お嬢様、只今来たのは何者ですな」と詰問するが如くに訊ねた、龍子はこの強い、尖つた聲がどうしても氣に要らぬ。

「お前の知つた方ぢや無い」

「はい、私は知りません、知りませんからお訊ねするのです、然も多分の金子を藏いて歸りました」

「私が恵んで進げたのよ、有利な事業を爲るに、資本のお金が無いと云つて、私に救助を求めて来たから」

「いくらお遣はしになりました」

「乳母にさう云つて、三井銀行の小切手を書せて一乳母、いくらお遣りだつたかね」

お松は白い眼で自分の良人を沈と見て「八百圓と被仰つたぢやありませんか」

「え、八百圓！、そ、そんな大金を……全體彼の者は何處の者です」

「何處の人だか知らないの」

龍子は濟ましたものであつた。

「お嬢様、あなた何んといふ勿體無い事を遊ばすのです、只今の御財産で、八百圓や千圓の金を、假し他にお恵み遊ばした處でお家に瑕の付くやうな恐れはありませんがそれにしてから此のせち辛い世に生れて、見ず知らずの人間に、八百圓の千圓のといふお金を、ばい／＼お遣はしになる法はありません、私はあなたが、先日以来學生や壯士に澤山のお金をお遣はしに爲るのを知つて居ます、志はありながら資の爲に學問をする事の能きぬ書生に、多少の學費をお遣はしになるのは、或る意味に於て大功德でございます、けれどもお嬢様のやうに數の知れない無心者に對して、何百圓といふ大金を惜氣も無くお遣しになつては、御當家の御身代も風前の燈火でありますぞ、お父様お祖父様御先祖代々のお遣し遊ばしたお屋敷に、やがてはべん／＼草の生へるやうになりまするぞ、お嬢様はまだお年もお召し遊ばしませんから、是れは已むを得ぬにした處で、お松が側にお付き申して居りながら、一言の御意見を申さんといふ筈はない、夫れが爲の乳母ぢやないか、それが爲の附添では無いか」

常には物を云つた事の爲い金次郎が、涙を流さぬばかりに是れだけ云ふのは、熱々で

あつたらう。

お松は此方へ膝を向けて「あなた、それは何んですよ、お嬢様に向つて何んといふ事を被仰るのですよ、失禮ぢやありませんか、お屋敷にぺん／＼草が生へるの何んのつて……」

「結果が遂にさうなるから云ふのだ、不忠者め」

「あなたこそ不忠者ですよ、私はお嬢様のお心を善く知つて居るから、お詞に背かんやうに御機嫌を取つて居るのですよ、あなたなんぞの知つた事ぢやないから、あなたはお藏のお刀の錆びないやうに、そちらの御用を爲さいますし、ねえお嬢様」

(五)

金次郎とお松との間には、龍子と同一年の娘があつた、これは名をそよ子と云つて、さのみ纏致も悪くない、お松がこのそよ子を生み落とす間も無く、龍子が生れたので直に乳母として上つたのであつた、されば龍子とそよ子とは乳姉妹、お松は一人の乳で、我が子とお主とを育て上げたのであつた。

龍子は氣高く品の好い生れであるけれど、そよ子はそれに反して、極派手好きで、極ハイカラな、品の無い、口数の多い、どちらかといふと、お嬢様よりは藝妓に近い風俗であつた、それは當人の體格氣質にも由るけれど、お松を本尊としたこの家庭が、やはりそよ子をそれに作り上げるに格好した程度であつたかも知れぬ。

それであるから、そよ子と龍子と氣質の適ひさうな筈が無い、お主の事であるから、そよ子は、屢龍子の御氣嫌ひに行くけれど、龍子の方では擯斥する、殊に大事の戀人を奪られてから、女は恐ろしい者としてそよ子までも近けぬ、聲を聞いても顔色をかへる位であるから、近頃はそよ子の方からも訪ねて行かぬ、殆ど同じ屋敷に居るやうな間でありながら、宛ら異越の如くである。

お松はこれが面白くない。

何方かといふと、我が子の方が可愛い、龍子を大事にするのも、要りそよ子を可愛がつて貰はうといふ慾心があるからである、それに龍子がかんなであるので、お松は斜めならず不平であつた、私が死んだ後で、お嬢さまはそよ子を構つては下さるまいから今の間にそよ子の身の立つやうにして置かねばならぬ、といふのが日頃のお松の分別

それならそよ子にどうして身を立てさせるのかといふと、好い婿を迎へて、出来るだけ財産を作つて遣るといふのであつた。

その好い婿の候補者に算へられて居る内の一人で、名を佐久間次郎といふがあつた、これは三條通のさる商家の倅で、多少の學問はあり、多少の財産はあり、ハイカラで當世風といふのが甚くそよ子の氣に入つて居た、いや、そよ子ばかりではない、第一はお松の氣にも入つて居た。

さう云ふほどの美人でもないのに、この次郎そよ子でなうては夜も日も明けぬやうに毎日時を定めて遣つて来る、家には下女と上女とが居るばかりで、お松も金次郎も大體お上へ上つて居るから、内はそよ子一人の世界だ、そよ子と次郎とは恰で疊の上の駕籠のやうに、人目からも羨ましいほど親密に交はつて居るのであつた。

(六)

そよ子と次郎との間に、甘く蜜の如き物語絶えたる時、お松は朱き盆の上へ、林檎の

色好きを山の如く盛つたのを持つて、笑ひながら入つて来た。

「お母さん、何處へ行つてたの、お客様を置きッ放しにして……」

「おほい、佐久間さん失禮致しましたね、何もございませんが、まアお一箇召し喚れ」

「どうも有難う、お邪魔をした上、御馳走になつては濟みません」

「まア御ゆツくり、私はまだお嬢様の御用を致さねばなりません」

云ひ捨て、起たうとした。

「あらお母さん待つて頂戴よ」

「何んだねえ、お前は！」

「まア、一寸よ」

「何んですてばねえ」

次郎は笑つて「いつもそよ子さんと差し對ひにはかり爲るんですから……」

「おほい、好いぢやございませんか、こんな者でもお氣に召したら何處へでもお伴れなすつて下さりませよ、おほい」

と云ふ中に姿は消えた、然も間の襦を閉して置いて……

次郎は思はず火のやうに染めた顔を、そよ子と意味ありげに見合せた、そよ子も目の縁を紅うした、

「母は誰方にでもあんな事を申すんですよ、あなたお氣に遊ばさないで……」

「眞個に捌けて在らッしやる、私は餘りの意外なお詞に驚きました、然しそよ子さん、お母様は、あなたと私と情交でもあるやうに思つて在らッしやるのぢやないでせうかね」

そよ子は此の瞬間に、不思議な智慧を天より與へられた、その智慧は閃めいて、そよ子を今までの處女では無いやうにした、彼女は面を掻けて、

「もし、爾うだつたら何う遊ばして？」

「えー！」

「あなたと私とはお母さんに疑はれてるのですわ——どうしませう」

そよ子はもう一人前の女であつた、斯う言つて身を揺つて、次郎の面を見入つた時、襦の外で、

「乳母、乳母」と呼ぶ聲がした。

「あゝお嬢様ですわ、佐久間さんお嬢様ですわ」

穴でもあらば入りたさうに見えた。

「乳母、何處に居るの」

云つて襦をがらりと開けたは龍子であつたが意外にも見知らぬ人が、そよ子と差對ひで坐つて居るのにびっくりして、又さつと襦を閉ぢた、そよ子は顔を眞赤にして、

「お母さん、こゝには居ませんわ」と立つて襦を少し開けた。

「さうかい、ぢや彼方へ行つたのだらう、お前、ちつとお來で、いゝ物を上げるから」
さる義理一べんのやうに云つて、龍子は忽ち去つた、次郎は襦の間から、恍惚として其うしろ姿を見送つて、海棠よりは品もあり色もある牡丹の花が、目に移つたらしくホツと息した、彼れの心はこの一瞬間に甚だしく變化したのであつた。

次郎はその翌日より前とは勝りて、一足繁くそよ子の許を訪ふやうになつた、次郎の心はそよ子が戀しと懐しさに迷ひ來るのでは無い、他に深く望む所、冀ふ所があるのと

は神ならぬ身のお松も知らぬ、そよ子は原より知る筈が無い。
 ある日次郎は例よりも時間を早めてそよ子の許を訪問したのであつた、そよ子はまだ
 裁縫の師匠から歸らぬ、次郎は舌を吐いて計略の當つたのを歡んだ。
 次郎は待つ間の無聊を慰めるといふ口實でお松の許可を得たる上、南小路家の後庭へ
 散歩に出かけたのであつた。

名にしおふ南小路家の庭の廣さ、日の長閑さ、花壇には白紅入り亂れて菊の花が咲い
 て居る、その上を秋の蝶の力なく飛び交ふさま、二なく憐れに、さうして優しく美し
 かつた。

次郎はこの好景色に包まれて、茫然と立つて居たのであつた、此の時菊の花の幾族か
 を隔てた彼方に當つて、

「あなた、此方へ來らッしや」と、圖らずも呼び掛けた者がある。

驚いて見かへると、菊よりも美しく、蝶よりも優しき龍子が笑を傾けて、花の香に立
 つて居るのであつた。

「やア、お嬢様ですか」と次郎は慌て、禮を返して「どうもお美事ですなア」

「いえ、十分に手入を致しませんので、花に些とも趣がございませぬ」

「いや申々、御丹精が現れて、至極結構でございます」

「まア此方へ來てお懸けなさいまし」

龍子の指す處を見ると、陶器の床几が三箇ばかりも置いてある。

「どうも恐れ入ります」

「好いぢやございませぬか、さア何うか」

と龍子は桃色の半巾で床几の塵を拂ふのであつた。

讀者よ、龍子は誰人に向ひても斯く如才無く扱ふのである、彼の女は自分の雄々しき
 心より、假し男子の前に在りても、羞愧を合むことなどは無い。

「どうも益恐れ入りますな」と次郎は龍子の側近く進み行きて「まだ染々御挨拶も
 致しません、私は佐久間次郎と申す無調法者として、御家來のそよ子さんとは格別御
 別魂に願つて居ります、此の後は何分御最宜にお願ひ申します」

「御挨拶痛み入ります、私もちよい／＼お見掛け申しては居りますが、つい失禮して
 御挨拶も致しません、御存じの通り、私一人で他に頼りの無いものでございませぬから、

殿方のお友達がどんなに戀しくございませう、どうか折々お遊びに来らっしゃいませ、別にお待ち遇は致しませんけれど、誰いお茶なりとお入れ申します」と龍子は又如才無く云つて「まアお掛け遊ばせよ」

「それでは失禮致します」と次郎は恐る恐る床几に掛けて「どうも御綺麗ですな、私はこの多くの菊の花に、あなたのお美しいお心が映じて居るのであるまいかと思ふのです」

「まア、お世辭のいゝことばかり被仰つて……おほい、いゝ」

「お世辭ではありません、お嬢さん、私は先日あなたのお姿を拜見してから、どんなに——どんなに、あなたの……」

「ちよいと御覽遊ばせ、あの蝶々が——まア可愛いではございせんか」

(八)

次郎はすり寄つて、龍子の面を穴の開くほど覗つめた、龍子は厭はしげに蝶の翻々飛び交ふのを見るのであつた。

「始めてお目に掛つて、こんな事を申し上げたら、失敬な禮義を辨へん奴だと思し召すでもありませんが、それを堪へる事の能きない、辛い、私の心をお察しなすつて下さい」

龍子は聞えぬ風をして、蝶の行方を見てばかり居る、次郎は堪へ難ねたやうに、片手を龍子の膝に掛けて、

「ねえお嬢さん、世の中に心の思ひを翅に載して、花の邊を迷ひ歩く蝶の戀ほど憐れな物はありませんよ、あなたはそれを見ぬ顔して在らっしゃる事が能きますか」

「私、蝶ばかり見て居てよ、眞個秋の蝶は憐れですわねえ」

「秋の蝶の——あなたはその憐れに同情なさる事が能きますか、もしお嬢さん、秋の蝶よりもまだ憐れに、さる方の心の香りを慕つて、日に瘦せて行く人間がありますよ、あなた夫れにも温いお情を分けて下さる事が能きますか」

「そよ子は何う致したのでございませう、もう歸らうなものですね」

「私はたゞあなたのお情で——お情の露を咽はうとして居る秋の蝶です、もしお嬢さん、どうか私の心をお察して下さい、私はあなたの爲に、いゝ、いゝ、命までも捨てる覚悟」

です、命までも……」

次郎の語は亂れに亂れて且拙かつた、されど其の中に籠つて居る真情が、多少露はれぬのでは無かつた、然し龍子の心は凍つて居る、その胸に一點の同情も無い。

「失禮ですが、私これで御免蒙ります」

云つてつと床几を放れた、次郎は慌て、袂を握つて、

「まアお待ち下さい、私の熱い血はこの私の手から通はぬのでせうか、お嬢さん、あなたは誤解して在らつしやる、あなたはまだ私の心を十分にお察し下さいませ」

龍子は嚴格に「佐久間さん、私は生れて以來、これほどの侮辱を受けたことはありません、この手を放して下さい」と力任せに振り放つて「あなたのやうに被仰るのは、女に對して此の上も無い無禮です、私は一生を獨身で送る事に極めて居ます、もう何んにも承る必要ありません」

「お嬢さん、それは餘りです、私は御覽の通りの武骨漢ですから、或はあなたの……」

「もう何も聞きません」

「……あなたのお怒りに……」

「もう聞きません、どうあつても聞きません、早くお歸りなすつて下さい」

云ひ捨て、母家の方へ去つた、後に次郎は手の中の玉を奪られたやうに惘然して、菊花錦の如く咲き亂れた中を、悄悄元の方へ歸らうとした。

「佐久間さん、覺えて在らつしやる、あんまりだわく」

云を聲がうしろの方に起つた、驚いてふり返ると、5つの間に來たのか、「むら紫る菊花壇の蔭に、そよ子は打伏して泣いて居るのであつた。

(九)

次郎は驚いて「あ、そよちゃんや無いかどうしたの、え、どうしたの」

そよ子は歎歎の聲を絶たぬ「餘りだわ、餘りだわ」

「泣いて居ちや分らない、あなた何時お歸りなすつたの、僕待ち遠しくつて、菊を拜見に來たのです」

「宜ごさんすわ、さうして澤山お愚弄なさいまし」

「困りますな、夫ぢや、全體どうしたといふのです」

「あなたのお胸にお聞きなさいまし、私こんな口惜し……」

「困るねどうも、胸に聞けつて……何をですか」

「何をって餘りだわ、遠くは聞えないけれど、私だつて心があります、餘りだわ、餘りだわ」

「心があるつて……何んですか」と次郎は故意とらしくそよ子の面を覗き込んで「え何んですかね」

「あなたお嬢様と手を引き合つて、何をして居らしたの、近頃は今までのやうでも無く、毎日被入ると思へば、皆お嬢様の爲でしたわねえ、宜さんすよ、どうして私ばかり袖に爲さいまし、私だつて考へがりますから」とそよ子は袖を噛むのであつた。

「どうしてそんな理ぢや無い、餘り菊が奇麗だから、拜見に出た處へお嬢さんがお越しになつて、貴女のお噂をして居たのですもの偽と思し召すなら、お嬢さんに聞きて御覽なす」

「あなたの様な不人情な方は、又と一人有りや爲ない、もう宜くつてよ、私とあなたとは普通の惡意——どうですよ、そしてお嬢様とは——あア私は捨てられても致し方ありません」

「馬鹿な、今となつて貴女を捨てるなんてあなたには私の心が解らんのかね」

「解つてるから斯う申すのです、佐久間さん改めてお禮を申します、あなた善く私を弄んで下さいました」

そよ子は噛みしめた繻紵の袖を、びりりと噛み破るのであつた。

「失敬な事を被仰い」と次郎は思はず色をかへて「私はもう絶交します、あなたのお宅へはもう来ません」

云ひ放つて去らんとした、そよ子は慌て、「佐久間さん、一寸待つて下さい、私、あなたに……」

「いえ、背きません、餘りといへば餘りの云分です、人を……何んだと思つて居るのだ」

「あら、佐久間さん、私あなたに……」

云お詞の中よりそよ子はさめくと泣き入つた、されど次郎は振り返つて見やうとも

せず、菊花壇の間を縫うて、一は龍子に弾かれた鬱念もあるべく憤然として立ち去つた。

「お嬢様も餘りだわ、私と佐久間さんとの間を知つて居ながら、手を引き合つたり何んかして……」

「これ何を云つて居るのだよ」

母のお松は何日の間にかこゝへ来て、娘の機嫌を取るものであつた。

「さアお歸りなさい、いつまでもこんな處で泣いて居る者ぢやありません、御覽なさいよ、彼の樹の上で、百舌鳥が笑つて居るぢや無いかねえ」

(十)

二三日過ぎて、龍子の前へ出た序に、金次郎は斯う云ふ事を云つた、

「お嬢様、私は私の家族に、不忠者のあるを恥ぢます、お嬢様、どうか御注意を願ひます、薔薇は美しい花の中に刺を藏めて居ます」

金次郎が龍子の前で是れだけ云ふには、どれ程苦心したかも知れぬ、然し龍子は餘り

金次郎を好いて居らぬ、金次郎ばかりで無く、世界中の女も男も、龍子の眼からは人の美を嫉む蛇のやうにも見え、人の幸福を呪ふ悪魔の如くにも思はるゝ、人の云ふ事は悉く偽りで、人の心切は虚偽の上からこるもを掛けた天賦羅同様だと信じて居るそれで金次郎の忠言も身に沁みて嬉しうは聞かぬ、堯爾ともせず机に凭れて、

「不忠者はお前の家族ばかりぢや無くつてよ」

「ではありませうが、特に私の家族は不忠者でござります、御主君たるお嬢様に對して甚だしく不忠でござりまする」

「そよ子は爾うかも知れないね、お前の娘は自分一人が高い處に居て、他の者の跪いて倒れるのを笑はうと待つて居る」

「誠に取入ります、然し他の跪き倒れるを笑ひ嘲けるよりも、うしろから突き倒して懐の物を奪はうとする悪人の方が恐しいではございませんか」

「世の中は厭なものねえ、そんな人間ばかりが住んで居る」

「その中にも私の妻の如きは……」

金次郎は云ひ掛けて口を噤んだ、何十年來伴れ添つた女房が、正しからぬ人間である

のを知つて居る。

龍子はそれに被せるやうに「お松は好いわお松は禽や獸ぢや無くつてよ」

「いえ、私の妻の事を申すのではありませんが、悪い臭氣のある花は、いかに美しくてもお近げになる物ではありません」

「お松は善人よ、廣い世界に、もし私の事を思つて呉れる人間があれば、それはお松だと私は信じて居る」

「お嬢さま」と金次郎は膝を進めて「あなたのお目は曇つて居ります、悪い蟲はもうあなたのお心へ食ひ入つて居ります」

「お松は私の云ふ事を實行して呉れる、私の爲る事に賛成の意を表して呉れる」

「それが第一不忠の證據でございます、お嬢様の昨今は恐れながら善いお所爲ではございません」

「えッ、私のする事が……」

「私はお逝去れになつた旦那様に代つて云ひます、お嬢様は近頃お氣が狂つて在らッしやる」

龍子は愛嬌の無い眼をきつと睨つた、金次郎は驚かぬ、

「もし黒い物を白いと信ずる人があれば、その人に常識はございませぬ、お嬢様が私の妻を……」

その詞の終らぬ中に、龍子の顔は眞青になつて、

「私は嫌だ私はお前が嫌ひだ、退つてお呉れ、早く退つてお呉れ」

「いえ」と金次郎は頭を掉つて「まだ申し上げる事があります、暫くお耳をお貸し下さませ」

(十一)

龍子は金次郎の忠言に耳を傾げやうともせず空噓いた、金次郎は沈痛な調子に、やゝ涙をも含ませて、

「私がお嫌ひとあれば、私は直に退きます、魂のみをお家に止めて、身體は何處の山へでも潜みます、然しお嬢様、私が御當家を退いた後、御當家の柱となり梁となりて、誰があなたを保護して参りませう、私の娘、私の妻、是れは悉く信用するに足ら

ぬ不忠者です、さらば肝腎の土臺となるべきお嬢様は如何でせう、二年前までは天晴れ南小路宗利様の御世嗣として恥ぢない御氣質、御品位、悉く御一身に具はつて居りましたが、悲しいことには、谷口様が花江様と御結婚遊ばしてからのお嬢様は、失禮ながら以前のお嬢様ではございませぬ、以前のお嬢様が梅なれば、只今のお嬢様は蕪蕪でござります、恐ろしい蕪のある蕪蕪でござります、以前のお嬢様が、世の善事をお守りなさる神様なれば、只今のお嬢様は、世を悪に導きたまふ惡魔でござります、あなたはお先祖のお築き遊ばした土手をお少しづ、毀してお行きなさる蟻同様です、私の目からはあなたを大黒柱として御當家をお任せ致すことは能きませぬ」

金次郎の詞には血があつた、真心があつた、忠義に燃ゆる火があつたけれど、龍子の心にはその血、その真心、その誠忠が響かなんだ。

殊に谷口様の語を聞いてから、清しい血は吊り上り、美しい眉は逆立ちて、息遣ひも暴くなつた、總ての様子が山雨將に來らんとして、風の樓に滿つる如くであつた。

金次郎は又詞を續けた。

「……で私がおし退職するとなれば、私に代つて御當家の柱となる者を置かねばなり

ませぬ、けれどお嬢様、月給で働く人間に一片の誠忠を認める事は能きませぬぞ、金の爲に働く人間に、真心のある者はありませぬぞ、宜しいか、お分りになりましたか」と云ひ切つて、更に容を正して「由て私はお嬢様に、御養子をお勧め申します、正當に御當家を御相續遊ばして、御當家の名譽、地位、血統を正しく御維持遊ばすべき、立派な御養子をお迎へ遊ばすやうにお勧め申します、そのお方の御決定になつた時が即ち私の退職する時であらうと信じます」

金次郎の真心は、遂に涙となつて、はらはらと滴り落ちた。

龍子は土の如く變つた唇の間より「穢はしい、穢はしい、養子だなんて……そ、そんなもの……」

「いや、爾らではございませぬ、養子も人物に由ては勝れて立派な方がござります」

「男は皆偽り者だ、私は一生涯を偽り者には任せないよ」

「どう云ふ理はありません、お嬢さま、あなたそんな事を被仰つて、どうして御家名を續けやうと思し召します、あなたお一人の南小路家ではございませぬ、この御家名には御先祖代々の御名譽が傳はつて居りますぞ」

金次郎が氣色ばんで詰め寄る時、間の瀬がうつと開いて、
「お嬢さま、お客様でございますよ」
云つて小間使が一枚の名刺をさし出した。

(十二)

龍子は名刺を取つて見ると金縁の厚紙に『筆村正也』と刷つてある、然しその姓名に聞き覚えが無い。

「筆村正也、聞いた事の無い人ね、何んの御用だか聞いて見たの」
下女は畏まつて「あの、先日お金の御無心に來らした方でございます、あの八百圓の……」

「そんな方があつたのかわね」

「お嬢さま、もうお忘れでございますの、お乳母とんのお手から、お遣はし遊ばしたぢやございませんか」

「爾うだつたかねえ、私、すっかり忘れて居るわ」

龍子は先代が血と膏とで貯めた金を塵とも埃とも思つて居らぬ。

「それでその方の被仰いますには、お蔭で事業も緒を得て、追々進んで参りますから、今日は惣々御禮に参りましたつて……」

「異しい人ねえ、お禮なんぞ何うでも好いちやないかねえ」

龍子は格別氣に止めた様もない、下女は又口をついで、

「……それでは是非お嬢様にお目に掛つて、染々御心切が謝したいと被仰るのでございますが……、何う致しますせう、お逢ひ遊ばしますか」

「否なこと、逢つたつて仕様が無いわ」

金次郎は「膝揺つて」いや、さうぢやございません、今日までお嬢様の御寛宥なお心に附け入つて、金子の御無心を申し上げたものが、幾千百人に及んだかも知れませひけれど彼等の常癖として、お借り申す時だけ頭を下げて、後でお禮に参つた者は一人も無い、その中で事業が緒を得た、その御恩を謝する爲めに惣々來たといふのは珍らしい、定めて性質も好い男でせう、お差し問へが無くばお逢ひ遊ばしては如何でございますか」

「どうね、逢つても好いけれどね、男は虚言ばかり云ふからね」
 「では私でも逢つて遣りませうか」
 金次郎は熱心であつた。龍子は少しく考へて、
 「いえ私が逢ひます」と例の何處までも沈着いて「こゝへ通しておくれ」
 「は」と下女は應接所へとも云はぬを不審りて「こゝでお逢ひになりますの」
 「何處でもいゝぢやないか」
 「夫れはさうですけれど……ちやア此方へ御案内致しませう」
 金次郎が熱血を注いで云はうとした今の話も、是れで腰を折られたのであつた。
 程もなく筆村正也は下女の案内に伴つて入つて来た、年は二十八九であらう、色の白
 い、眉の濃い、脊のすらりとした好男子、身には別織辨慶縞琉球袖の小袖に、黒鹽
 五所紋の羽織、それに金縁の眼鏡、金鎖の時計、左右の指にまで金々と飾り立て、悠
 然と座についた、是れが見ず知らずの人に向つて、金の無心を云ふ一種の乞巧と思ふ
 ものは無いだらう。
 機織蟲のやうに頭を下げて「これはお嬢様で在らっしゃいますか、私は筆村正也、始

めてお目に掛ります、以來は何卒御別懇に……」
 龍子は儼然と「は」と云ふばかり。

正也は仔細らしく、先日八百圓の恩恵に預りし恩を謝して復、
 「私の経営致して居ります事業は、機械を以て田地を耕作致しますので、もし私の
 経営通りに成功致しますれば、非常の國益にも爲るであらうと信じます、夫れ故私
 も先年來莫大の資金を投じまして、様々に苦心致した結果、先祖からの遺産は失くす
 る、世人からは嘲笑される、折角の發明も中途で挫折しやうと致した處を、お嬢様の
 爲に資金の恩恵を得ましたのでござりまするから、お嬢様は事業の親、私の親、國
 益の親でござりまする」

龍子は耳を掩うやうにして「甚だ失禮でござりますが、早く御用を被仰つて下さいま
 し、誠のなにかお世辭は、蠅よりも煩厭く思ひます、
 「はい、けれどお世辭と申すではありません、私は私の感じた……」

「どうか御用を被仰つて下さり、もし御用が無くばお歸りを願ひます」
龍子の詞は刃よりも鋭かつた、けれど正也は氣に障へた状も無い。

「では申し上げます、先日拜借した處の八百圓、あれで事業の上で、何れほどの益を得たかも知れませんが、處が今少しと申す處で又も資金に缺乏を來しました、それで實は只今では殆ど中止同様の姿になつて居ります、このでもし五六百圓の御救助を得ますれば、今度は必然成功してお目に掛けることが出来ますが、どんな者でございませう、お嬢様のお手許で、更に五六百圓をお貸し下さる事は出来ますまいか、前の御厚意に甘へて、更に斯様な事を願ひますのは、甚だ心苦しい次第でございしますが、先刻もお話し申す通り、私もこの事業に就て少からぬ金を費しましたので……」

正也の詞は殆ど堅板に水を流す如くであつた龍子は、愈々煩厭さうに、
「爾う致しますと、あなたは金欲しくつて來らつしやつたのですね」
「と申すではありませんが、先日のお禮も申し上げたし、又只今の窮状も御承認申して、成るものならば……」
「宜しうござります、ちや五百圓お貸し申しませう」

「え、それでは……」

「金次郎、お前出して進げてお呉れ」と龍子は事も無げに云つて「私、一寸失禮するから」

云つて座を立たうとした、金次郎は驚いて「お嬢さま、まあお待ち下さいまし、あなたはこの御仁の爲に、再び五百圓のお金をお出し遊ばさうといふのですか」

「ああ爾うよ、お話を聞くのは煩厭いから、五百圓出してお歸し申してお呉れ」

「いえ、これは爲りません、私の手で理由の無い金をお出し申すことは能きません、と云つて正也の方へ膝を向けて「筆村さん、君は全體何といふズウ／＼しいことを云ふ、前の八百圓をお返し申してもすることか、甘言を以てお嬢様に近づいて更に五百圓の無心を云ふ、そんな奴が何處にある、歸りなさい、今日は私が承知をせん」

金次郎の聲は慄へた。龍子は立つにも立たれず、正也は憤と色をかへたのであつた。

正也は色を變へる、金次郎は儼然構へる、今にも事の起りさうに見えたのを、龍子は冷かに見遣つて、

「金次郎、お前私の命令を何故聞きませぬ、私が人間の寶たるお金を、理も無く人様に差し上げるのは、云ふにも云はれない深い事情があるからだ、お前がお進ば申さなければ、私の手許からそれに相當するだけの物を進げます、私の眼からはお金も無く、財産も無く、玉の釵もなく、金剛石の指環も無い、私はどうかして身に累る世間の事情や財産や家柄や、總ての物に離れて一本立の身體になつて、山へでも入りたいたいと思ふのだから……おう、爾うく私の手文庫の中に、古渡珊瑚の根掛がある、彼と指環とをお進ば申ませう、すれば五百圓位には……」と云つて座を起たうとした。

金次郎は熱い涙をハラ／＼と流して「お嬢様、まあお待ち遊ばせ、それほどまでに被仰るなれば、是非がございませぬ、今日の處は御請求通りに應じます、筆村さん、あなた此方へ來らっしゃい、金子をお渡し申します、あアこんな事ならお逢はせ申すのでは無かつたのです」

正也は始めて顔を柔げて「お嬢様、實にあなたは神様で在らっしゃる、このお禮には

と云ひかけて懐中から一通を取り出して「是れを差し上げて置きます、この封の中にはお嬢様の御利益になる事が認めてあります、後でゆっくり御一覽下さいまし」と龍子の前に置きて立ち去つた。

後で龍子は彼の一封を取り上げた、表には「南小路龍子様」と認めてある、どういふ事が書いてあるのであらうと思つて、封を切つて見ると、中にはもう一通封のしたのが納れてある、それも同じく「南小路龍子様」そして先方の名は書いて無い。

不思議に思つて考へて居る處へ、金次郎は例の莞爾ともせず入つて來た。

「只今の男に、御命令通り五百圓渡しました」

「御苦勞だつたね」

「以來は輕々しく彼等の無心をお聞き入れにならぬやう願ひます、限りのある財産で限りの無い無心者に應じる事はできません」と金次郎は何處までも苦り切つた。

「金次郎、今の人、こんな物を置いて行つたの、是れがお金のお禮だつて……」

「乞丐は矢張り乞丐です、御覽にならぬが好いでせう」

「だつて私の爲になる事が書いてあると云つたの、お前讀んで見てお呉れ」

「はら」と金次郎は手に取つて更に新しく封を切つた、手紙は美しい假名交りの手蹟で、こんな事が書いてあつた。

「思ひたえかねて一筆申上げらう、私は佐久間次郎——あなたのお心に佐久間次郎の名を御記憶はあるまじく存じ候へどもお庭の菊に深き香りの絶えぬ間は、私のこの思ひの絶え候時はあるまじく存じ候へ、私はいつぞやあなた様の御許近う参り候爲私唯一の戀人にて候ひしそよ子とのにも見捨てられて、今は頼る邊なきに漂ふ小舟となりたり、私の心の中はあれと思し召して一掬同情の涙御を、さう下され候は、私は百年の壽をあなたの爲に斷ち切り候とも、さらく恨みには思ふまじく、幸き便りに任せて心にあまる思ひのたけのみを申し上げたり」と
金次郎の顔の色は又變つた、龍子はニコニコと笑つて居る。

(十五)

「お嬢様、私はあなたに對して、實に何とも辯解ございませぬ」と金次郎は其の圓い眼に涙を潑えたが、更に詞をついで「お嬢様にこんな不禮な艶書を贈つた、その文言

の中にそよ子の名を見るに至つては、私殆ど云ふ處を知りませぬ、罪は私の娘にある、試し切にしても飽き足らぬ奴でございます」

「そよ子が悪い事なくつてよ、佐久間が悪い事無くつてよ、」

「いえ罪はそよ子にあります、私は彼れを嚴重に處分して、お嬢様へ十分のお詫を致します、けれどもお嬢様佐久間などいふ痴漢が斯ういふ不埒な物を贈るといふも、必竟あなたがお單獨で在らつしやるからでございます、あなたに歴としたお配遇があつて御覽遊ばせ、いかな色情狂も斯様な物を贈る氣遣ひはありません、……ですから私は此の點に於て、更に御養子をお迎へ遊ばすやうにお勧め致します」

龍子は顔を盛めて「そんな事聞きたくはないの、私の一度云つた言は、二度三度五度云ふも同然よ」

「ではございませうが、深く御管家の將來を思召しまして、一日も早く……」

「えい、濃厚いぢやないか」と龍子は目を釣り上げて「お前、私の云ふ事が分らないの、私は世の中の繋累をふつり断つて、山の奥へでも入りたいと云つてゐぢやないか、そんな處へ御養子を迎へて何うするの、全體お前は私の心に背いて可けない、同

「事でもお松は私を助けやうとして呉れる、お前とは大變な違ひだわ」
「妻の不埒は云ふまでもありません、彼れは自分あるを知つて、お嬢様あるを知らぬ奴です」

「お前は退つておくれ、どうしてはお前と私とは氣が適はな」

「いえ、御當家の御繼嗣のお定まり遊ばすまでは、いかやうに仰せ遊ばしても退りませぬ、私は私の任務があります」

「ぢや、どうもつても退らな」

「は、假令一命を召されまして……」

「お前が退らなければ、私が出る、私はもうお前と物も云はなから」
龍子は憤として座を起たうとした、金次郎は是れに驚いて、

「あやお嬢様、どうか御勘辨遊ばして……兎も角も今日は退ります」

「早くお退り、お前の様なもの、面を見るのも穢はし」

「は」と金次郎は手の甲の涙を拂つて「お嬢様に斯ほどまる嫌はれますもの、要り私わたくしの忠義が足らぬからです、私の身を恨む他ありません」

「お退り、お退り、早くお退り」

金次郎が惜々と引き退つた後で、龍子は佐久間からの手紙を寸々に引き破つて、何んとはなく面白からね様、煙の如き息をつきつ、机の前に座つて居る。

そこへ入つて来たのはお松であつた、龍子の懐へ入るやうに座を占めて、

「良人が又何か申し上げたやうでございますね、眞個に彼人にも仕様がございせん、どうかお想し遊ばして」

「もう、金次郎を私の前へ出さないうやうにしてお呉れ、私の心に反對しやうくとして居る」

「はい、宜しうござりますと」とお松はどうして龍子の機嫌を取らうかと、心の中に考へる様であつた。

お松は遂に龍子を慰むべく一策を案じ出した、それは龍子を誘ひ出して、東山の秋景色を見やうと云ふのであつた、この儂りの多し世の中に、山と水と花と紅葉と、四

の景物ばかりは時を違へず咲き、時を違へず霜に飽き、水は低きに就き、山は長へに翠を罩めて、自然の態を失はぬ、この他に自分の友とする物は無いといふのが、龍子の平生の異見であつた、それでか松は東山の秋景色を資料に、龍子の心の鬱悶を解かしと試みたのであつた。

「さう、清水の紅葉、そんなに宜くつて……」と龍子の面は稍解けた。

「新高尾が大さう好いさうでござりますよ、直お出掛け遊ばせな」

龍子は今に始めぬか松の注意が何處までも、行き届いて居るのを歡んで、直に準備にかゝつたのであつた、衣服を着かへて、髪を解いて、主従二人がぶらりと出掛けた、五條坂までは人力車、それからはお徒歩で、まづ觀世音へ參詣、音羽の瀧から降りて所謂新高尾の谿間を散歩した、霜に酔うて燃ゆるが如きは、若き男女の胸の火を彩つたかのやう、その間に交る青葉黄葉は、まだ色づかぬ心の戀を語るやうで、何とも云へぬ好い景色であつた、か松は圖ある茶店の前に立つて「お嬢さま夕暮の景色は又一段でござりますね」

「眞實ねえ、紅葉や花の美しいのを見るに附けて、人間の胸の穢なさが思はれること

よ」

「さぞお疲れでございませう、ちつとお休み遊ばしては如何でござります」

「さうね、別に疲勞れては居ないけれども」

「恰と座敷が空いて居るやうでござります、お茶なりともお喫りなさいまし」

二人は伴れ立つて奥の座敷へ通つた、この座敷の硝子障子越しに、紅葉の葉表に夕陽の照るのが見ふるされる、その又紅葉の照の下を、上り下りする人の姿の美はしさは、紅葉よりも見物であつた。

龍子は下女の運んで来た澁茶に咽喉を濡しながら、見るとも無く見て居ると、瀧の上の石段を徐に降りて来る男女がある、男は縞スコッチの脊廣に、金縁の眼鏡、そして洋櫻の洋杖をついて居る、女は男の肩とすれ合ふやうに、直と寄り添つて、手を引く合はぬばかりに歩いて居る、年は十八九、二十の聲は懸つて居なからう、甚麗綉のお召の小袖に、薄紫紋織縮緬の五所紋の羽織、ハイカラ卷にした髪艶の好さ、見るからが睦まじさうな夫婦であつた。

龍子は目も放たず、二人の襟を沈と見て居たが、次第々々に面の色が變つて來た、眼

の色が血走つて来た、息づかひが暴うなつて来た。
段々石階を下りて来た男は、龍子が一生命を懸けた以前の戀人の谷口健吉で、女はその妻の花江であつた。

(十七)

健吉と花江とは、自分等の頭の上から、恐ろしい龍子が白い眼で睨みつけて居るとは知らぬ。石階の中程から、互に手を引き合つて、嬉しうに降りて行く様か、他目からは美しく、龍子からはいかに醜く、いかに穢く見えたであらう。

「お嬢様、お気分はちつと好い方で在らっしゃいますか、え、お嬢様」と呼んで見ても返事がない。「もしお嬢様」と再び呼んでも答へが無い、お松は顔を見て驚いた。その清しい眼は血走つて、今にも紅い涙が流れさうな、さうしてホツ／＼と吐く息が火焔の燃ゆる如く唇を濡れて出る、その態が尋常で無い。
何事が起つたのかと驚いて見ると、座敷の下の石階を降りて行く人がそれである、お松は胸を抱くのであつた。

然し、何事にも旋風のやうに智慧の廻るお松は此の時此の機會を利用して、ある計畫を廻らしかけた、彼女の圓い眼はさうりと閃めいて。

「まア、怪しからないのでございますねえ」と挑發的に云ひ掛けた。
龍子は物をも云はぬ、うねり／＼した阪路を紅葉の徑に入り行く二人の影を、憎まうに嫉ましように、怨めしように、且羨ましように見送るのであつた。

「お嬢さま、さぞお腹の立つことでございます、こんな處を見ましては、私だつて好い心持は致しません」

「見せ附け無くつてもいいわ、私が保養に来て居る處へまで来て、是れ見よがしに見せ附けなくつても好いわ」と龍子の目は愈吊り上つた。

「眞個ですよ」とお松は受けて「是れを打捨つてお置き遊ばしては、あなたの御身分が立ちません」

龍子は沈と抑へて「もう歸りませう、お前の注意で、憎い紅葉を見た事よ」

「只今歸りましては、あなたのお氣の晴れる時がございませぬ、ですから今日はどうすればお氣が晴れるか、どうすれば御氣分が好くなるか、その根本をお聞き申さうと

思ひのぞろひます」

「根本つて、どういふ事なの」

「要りあなたは、谷口様を花江様の爲にお奪られ遊ばした、そのお怨がどうすれば晴れますかとお訊ね申すのでござります」

「死ぬより他仕方ないわ」

「え」とお松は驚いた。

「いえ、死んだつても此の恨は晴れやしな、どうしたつて……どうしたつて此の胸の、この口惜しさが忘れられるものかね」

「爾ういふ等はござりません、あなた御養子をお迎へ遊ばせ」

「乳母までが……否なこつた」

「ぢや、お嫁入り！」

「もうく」と龍子は耳を掩つて「そんなこと云つてお呉れを無」

「ぢや、どうすれば好いのでござりますと誰に云ひませんから、乳母にだけそツと被仰つた下りませ」

「どうすればつて……」

「私はどうかしてお嬢様のお胸が、少しでもお晴らし申したい、その爲にはどんな苦勞をしても關はない決心で居ります、それで何うすればお氣が晴れるか、ただ夫れがお聞き申したいのでござりますわ」

「どうね」と云つた龍子の顔は凄う變つて「谷口さんと花江さんと、御夫婦お別れなすつた時、私始めて胸が晴れるだらうと思ふの」

「ぢや、花江様が御離縁にお爲り遊ばさなければ……」

「私の胸は晴れないのよ」

(十八)

お松の膝は又進んだ「ぢや、お嬢様は其の爲にござりますな——花江様を谷口様のお手から引き放す爲には、どんな事でもお厭ひは無いでござりませうな」

「あア何んな事でも……」と龍子は決心の様で云つた。

「たとへお命を召されましたも」

「勿論、爾らとも、私の望みが協ひさへすれば、財産も地位も名譽も生命も、私の身にあらゆる物は、悉皆捨て、も厭はない覺悟で居るわ」

「きつとでございませうか」

「私生れてから嘘言を云つた事は無いの、お前、私の詞を信じて呉れなくつて」

「いえ、爾らではありませんけれど」とお松は沈と考へて「私、あなたのお望みを協へて進げます、きつと、きつと協へて上げます」

「もし爾らなれば私は死んだつても關は無いら」と龍子は沈んだ調子で云つたが「私何故こんなになつたのだらうねえ、何故こんなになつたのだらうねえ」と熱熱我が身に愛想の盡きる如く云つた。

それも、花江様の爲でございませうよ」とお松は更に挑發的に云つて、私かきつと恨みは報て進げます、その代りお嬢様、萬事私にお任せ遊ばさねばなりません」

「お前を信じて任せます、……私は悪魔になつたのぢや無いか知ら」

「人間に恨みはあるものです、其の恨みを晴らす爲には、命を捨てた例がいくらもあります」

「私」と龍子は動かぬ決心を面に見せて「悪魔と呼ばれたつて關はない、人間と云はれて苦しむよりも、悪魔と呼ばれてこの大苦痛が忘れたいわ」

「御安心遊ばせ、私がとうとかしてお望みを協へます」

「お松、有難うよ」と龍子は感謝する如く云つて、お前の心切は忘れないよ」

此の時、音羽の瀧の石段を降りて来た谷口夫婦は、何事かを嬉しそうに語つて、それと反對の阪路を上つて行くのであつた、夫婦が相愛し相親む様は、一番ひの胡蝶が兩兩翅を交へて花の園に狂ふやうで、更に波の上の鶯鶯が陸へ散歩に出たかとも思はれる」

それが眼に映ると共に、龍子の面は又物凄く變つて来た、彼女は自ら云ふ如く、心から悪魔に化したものかも知れぬ、人の幸福を呪ふ恐ろしい悪魔と化したかも知れぬのである。

お松は龍子の機嫌が、又變つて來さうに見えるのに驚いて、急いで歸途に就いたのであつた、その同乗の俣の上で「御安心遊ばせ、お嬢様の仇は取つて進げます、私の命にかへても取つて進げます」と練り返し練り返し云ふのであつた。

龍子はその日から一室に籠つて、人に面を合せなんだ、金次郎の心配、お松の策略、南小路家の内外は、殆ど暗黒同様となり了つた。

(十九)

此の四五日は世界中で只一人の同情者と思つて居るお松さへも近けぬ位であるから、平生から精神の好かぬ金次郎などを近付けさうな筈が無い、偶に用事があつて目通を願ひ出る事があつても、もうお前には逢はない、お前に逢ふ必要は無いのだからと云つて斥ける。

金次郎は全く途方に暮れて、毎日考へてばかり居るのであつた。

恰と清水の新高尾に遊んでから、五日目の朝であつた、お松は金次郎の前へ出て、新高尾で龍子から聞いた一伍一什を詳しく語つて「何をするのも忠義の爲ですから、私一狂言書いて見やうか、と思ひますわ」と云ひ出した。

金次郎は目をぎろりとさせて「一狂言書くといふと……」

「誠に罪な話ですけれど、谷口さん御夫婦の中へ水を指さうと思ふんです」

「水を指す」と金次郎は甚く驚いて「彼の御夫婦間を引き裂かうといふのだな」

「之も忠義の爲ですからね、花江様御離縁にお爲りなされない間は、お嬢様とうあつても慰まないと思仰るから、私一生懸命になつて、御夫婦間を裂かうと思ひますわ」

「然し、そんな事が出来やうか」

「私に少し考へがありますから、大體遣り遂げる心算ですの」とお松は良人の面を覗き込んで「さうさへ爲れば御養子を迎へると被仰るんですからね、随分否な役廻りですけれど、鬼に爲つて見やうかと思ひますの、どうでせうね」

「さうさなア、随分罪な話だが、忠義の爲には仕方あるまいかなア、彼して置いた日にはお嬢様とう爲さるか知れないからなア」

「私はあなたが此の事を黙つて見て居てさへ下されば、きつと望みを協へて見せます、然しお金は少し要りますよ」

「少し位金は要ても、それでお嬢様の御氣分が復りさへすれば、私は止むを得ず黙つて居る」

「ぢやア私に任せて下さるの」

「お前の力で行く事ならば任せやう、けれどお松、御家名に傷の付くやうな事をしちや可けないよ、夫だけを善く云つて置く」
「はい、宜うござんすとも」とお松は勢ひ好く飲み込んで「其の位の事は知つてまゐるアね」

金次郎はお松の獻策を、十全の策略とは信じて居らぬ、けれど南小路の家の爲には、是れだけの不徳を忍ばうと覺悟したのであつた、夫婦の間に水を指して、生木を引き裂くやうな悲しみを見すべき恐ろしい計策を自分の女房に實行させやうと決心したのであつた、然し心の中は面白く無い、それだけの事を云つた後で、ふいと花畑へ立つて行つた。

お松がきつと遣つて見ませうと云つたには必ず夫れだけの成算があるに相違無い、彼の女は良人の同意を得ると直、手紙を認めて佐久間次郎を呼びに遣つた、次郎を玉に遣つて、この苦肉の一計を爲し遂げるつもりと見えた。
例の菊畑の一件があつてから、覗いても見なんだ次郎が、使と共に遣つて来た、さうして物の一時間あまりも密談して、急ぎ足に歸つて行た。

(二十)

佐久間次郎がお松の許を辭してから、恰と三時間ばかりの後、日もちら／＼暮れさうになつて、二條邊の西洋料理屋へ、二人の客は案内せられた。
讀者記憶せられよ、この客は次郎と、さうして龍子から二度に千三百圓の金を無心した彼の筆村正也とであつた。

「佐久間さん、何んですな話といふは」と正也はまづ口を切つた。
次郎は正宗が注がれた小さい洋盃を舉げながら「他ぢやアないが、君に適當した好い金儲を授けやうといふのだ」

「私に」と正也は笑を含んで「もう南小路のお使ひは御免ですよ、何んぼ僕の面皮が厚いと云つて、さう／＼は行かれませんからな」
「いや、今度は別口さ」と飲み乾した盃をさして「まア一つ遣りたまへ」
「お話を承つてからにしませう、それを無くては」と正也は受けた盃を口にも觸れず「同じ物が旨く飲めませんからな」

次郎が正也へ物語つた要點は、其の身の龍子に對する戀を意地からでも成就させねばならぬ事、此の望みを協へるに附けては、財産の全部を撒ちても惜しいとは思はぬ事、そこで今日お松から囁かれた谷口夫婦の事に移つて、

「君の力で、谷口夫婦の間を引き裂いて呉れるんだ、花江さんが離婚の涙に泣く時は、即て我輩の戀の成就する時だ、お禮はいくらでもする」

「こいつは面白いねえ、すると僕が非常手段を以つて花江と谷口との間を裂く、それに龍子嬢が大満足を表して、あなたを良人に持つといふのですね」

「まづ爾ら、處で」と次郎は椅子を進めて「どうだらう、君に成算があるだらうか」

「有りますとも、此の位の事は、朝飯前です、要り手段の善悪は問ふ處でない、谷口夫婦の間を引き裂いて了へば好いのでせう」

「勿論爾らさ、龍子さんは自分が戀して居た谷口を横取せられた爲に、狂氣染みた真似ばかりして居る、それを金次郎夫婦が心配して色々龍子を説いた結果、遂に谷口夫婦を犠牲にする事と爲つたのだ、君骨折つて呉れたまへ、僕の爲、龍子嬢の爲、別しては君それ自身の爲に……」

「宜しい、僕も谷口には二三度逢つたことがあります、彼奴學士といふを鼻に掛けて甚だしく我々を輕蔑して居る、御安心なさい、是れで仇を取つて遣ります」

「脱漏なく頼むよ、これは所謂手附の金だ」と懐中より一包の金を取り出して「兎も角取つて置きたまへ」

「爾らですか、どうも恐れ入るですなア」と包みの中を開いて見て「五十圓は少いねえ」

「成功の上は十分に謝禮する、それは當座の手附がやないか」

「それなら頂戴して置ませう」と正也は澁々受け納めて「前祝ひに飲みますかな」

「大いに遣つて、大いに勇氣を附けて、一日も早く我輩を南小路家の相續人にしてくれたまへ」

「宜しい」と盃を舉げて「まづあなたの健康を祝して、而うして更にあなたと龍子嬢との幸運を祈りませう」

外には加茂川の水の音、東山の翠の色。

實に健吉と花江との夫婦間は、疊の上の鴛鴦と云はうか、頭を併べて咲いた蘭の花と云はうか、健吉の心は即て花江の心で、花江の思ひは即て健吉の思ひである、健吉が噓をする時花江も噓をする、花江が頭痛を覚える時は健吉も頭痛を覚える、それに不思議なことは、花江は家に居て、健吉は會社へ出て、雙方離れて居る時でも、花江の心に健吉の動作が時々響いて來るのであつた、それは健吉が會社で心配な事でもあると、花江の胸が理もなく轟いて、何とは無く不快な感がする、それと異りて、もし健吉に善い事のあつた場合は、氣も心も晴々と笑のみ溢れて、花江の胸が開いて居る、それで二人の心は相感じ、相聯つて、互の間に通つて居るのではあるまいかと、夫婦が嬉しう物語る事もあつた。

假し山が崩れかゝらうとも、假し雷火が飛んで來やうとも、假しや又大海嘯が襲ひ來つて、世間の總てを泥海にしてはうとも健吉と花江とは離れぬ間であつたらう、縦ひ千萬人の力があつて、身體と身體とを引き放さうとも、心は一團になつて天國へ飛ぶであらうと信じられた、

その日は日曜の休暇で、他に約束した處も無いから、健吉は午飯を濟ましてから、机

に凭れて妄想に耽つて居た、やがて幾十萬圓の主人になつた時、思ふやうな家を作つて、思ふやうな器具調度を買ひ入れて、最も空氣の好い、最も景色に富んだ、最も閑靜な、最も晴々とした處に、花江と俱に暮らしたら、どんなに面白からうといふのが、彼れの心にいつもく浮び出づる妄想であつた、

それで其の日も幾十萬圓を手握つて、是れから地面を買ひ入れやうとまで思ひ至つた處で、楽しい妄想は忽ち破られた、それは庭一つを隔てた花江の居間で清しい琴の音が起つたからであつた、

暫く耳を濟まして聞いて居たが、常に聴くよりは一段勝れて冴々と好い音色であつた、健吉は物好に、學生時代から尺八を善く吹くので、是れに合せて久しぶりに一曲奏て見やうと思ひ付いて、手馴れた笛を取りおろした、その間も花江の琴の音は好い響きを傳へて來る、

不意に吹き出して驚かして遣らうと思ふから、故意と黙つて、ふつと一つ息を入れて見たが音がせぬ、

斯ういふ理は無い筈だと思つて、更に調子を合せやうとしたが、どういふ物か音色

が出ぬ、裡面に故障があるらしい、健吉は愈奇しんで笛の中を透して見ると、誰か悪戯をしたものか、紙片のやうなのが突込んである「誰がこんな事をしたのか、怪しからんことをするぢやないか」

斯う一人言を云つて、火箸の頭で突き出して見ると、さて思ひ掛けも無い、假名交りの艶書であつた、

驚いて名宛を見ると『戀しき花江様』命毛より』と書いてある、健吉の面の色は異つて、健吉の手頭は慄へた。

琴の音は冴え渡つた、恐ろしい悪魔の手がもう此の家の幸福を掻き亂し始めたのであらうか。

(三十二)

尺八の間から引き出した艶文を讀んで見ると、左の如き怪しからぬ文句があつた。

一寸御知らせ申上げ外小生事前日御目に掛り候後甚だしく風邪をひき込み昨今頭も上らず打伏し居り申候こんな時に温き貴女の手によりて嬉しき御介抱を得候はば此

の儘死すとも恨みはあるまじきものをと協はぬ事を夢み居り候、貴女は鐵瓶の湯のふつくと波を起す處に健吉君とさし對ひにお爲りなされて葡萄酒などに陶然と酔ひたまはん時小生は冷たき夜着の中に薬と親しみ居り候境遇幾重にも御推察下され度く思はぬ愚痴を溢し候も戀に泣く男の常と御憐み下され度く候

さて二三日中に好き時機を見はからひ例の處より例の使ひさし出し候間御都合宜しく候はば顔見せにお越し下され度く自然御都合あしく候はゞその時使の者にその旨御返事下され度く願上候、尙申上度き事御座候へと忍ぶ戀路の果敢なさはこゝにて惜しき筆を止めざるを得ざる儀に御座候かしく

健吉は讀み終ると共に、慌てゝ元の通りに封じやうとして、其まゝ膝の上に置いた、この手紙の文句で見ると、最愛の妻は正しく姦淫の大罪を犯して居る、この『命毛』といふ男と、いつから關係して、いつから手紙を往復して居るかそれは分らぬが、文句の上へ現れた意味から察すると、尋常の間では無いらしい、例の處とは何處であらう、例の使とは何であらう。

けれど、けれど、花江に限つて人道に背いた所行をしやうとは思はれぬ、彼れは我れ

の最愛の妻である、彼れとはまだ一二年の契りであるけれど、彼れの心は熟く知つて居る、彼れの日常の行爲は熟く識つて居る、彼れは淑徳ある婦人である、少くも操の何たる位は知つて居る婦人である、それが僕の目を忍んで、仇し男と逢引き——そんな事をする筈がない、第一どういふ時間が無いでは無いか。

と一たんは打消して見たが、いや無い事は無い、僕は毎日会社へ出勤する身分である朝の九時から晩の五時まで、妻の許を離れねばならぬ身の上である、悪いことをしやうと思へば、その間に幾許でも出来る、僕の留守中に、彼女の外出したことはないか——無事はない、幾度もある、實家へ行くこと云つて出た事もあれば、親類を訪問すると云つて出た事もある、それかもし親類を訪問したのでも無く、又實家へ歸つて居たのでも無く、例の處で、この手紙の主と逢うて居たのではあるまいか、是れは何んとも云へぬ、上手の手から本が漏ると同じ事で、僕の信用の度が過ぎて居る爲に、そこへ心が附かなんだのかも知れぬ。

いつそ此の手紙をさし附けて、實否を問ひ糺して遣らうかとも思つたが、假へどんな事をしやうとも、彼女に實を吐くまいと思ふ心があれば、どのやうにも云ひ抜けるに

異ひ無い、それよりは今から十分に意を注いで、彼れの日常の行爲を監察したら、その中に化の皮を現すかも知れぬ、さうだ、是れは暫く見ぬ風をして、それと無く様子を探つて遣らう、と斯う考へて胸を擦つた。

琴は今終りを告げた、その音色までが面白う無い。

(二十三)

谷口家の家庭に清う照り輝いて居た月は、此の時から發りを帯んだ、萬事に如才無い健吉は、心の秘密を覺られまいと思つて、今まで通り渝る事も無く暮らしたが、然し其の面、其の詞に多少の影響を受けずには居られなんだ、花江に對して物を云ふ、その聲は朗で無く、花江に對つて笑を漏らす、其の眼の色は濁つて居た、花江は甚く心配して、

「あなた、何うか遊ばして、近頃は何んだか御様子が変わつてるやうですよ」と聞いて見る、けれど健吉は苦笑ひして、

「なアに」と一口に云ひ消して些も理を云はぬのであつた、さうして彼れの鋭い眼は

絶えず花江の舉動に注がれて居た。

花江は良人の素振が急に變つたのを、何う云ふ事かと氣を揉んで、種々考へるのであつたが、是れが原因であらうかと疑はるべき事も無い、何か自分に行き届かぬ事があつて、それを心に怒つて居られるのではあるまいか、夫で無ければ斯うまでも急に良人の機嫌の悪くなる筈は無いと思ふと、涙合むまでに悲しいのであつた。

「あなた、何がお氣に入らないのか知りませんが、もし私に不調法があれば、御遠慮無く被仰つて下さいまし、私、あなたの御機嫌が好くございませぬので、夫ばかりを心配して居ります」

一日良人が會社から歸るのを待ち受けて、思ひ切つて斯う云つた、けれど健吉は例の苦笑ひをするばかりで、

「私は何んとも思つてやしない、夫れはお前の邪推だらう」

「それならば好いのでございませぬけれど……、私あなたのお心に、何か秘密があるのぢやないか知らと思つて」

「私の心に」と健吉は白い眼で睨み如くして「秘密なんぞがあるものか」

「でも私の眼からは、御様子が見えて居る様に思はれてなりません、無いと被仰るものを強て申す理ぢやありませんけれど、萬一あなたに御心配な事でもあるか、又は私の身、心、所爲に何かお氣に入らぬことがあれば、どうか被仰つて戴きたいと思ひます、夫婦の間に紙ほどの隔てがあつても、心持の悪い物だと被仰つた事があるぢやございませぬか」

花江は一生懸命に云ふのであるが、健吉の耳へは、それに偽り飾りがあるやうに聞える。

「もう何も云つて呉れるな、今日は何んだか氣分が悪くて可げ無し」

健吉は斯う云つてふいと立つた、花江は悲しむ、恨めしむ、情無む、はらくと涙を流して、沈と其の後姿を見送つたが、もう堪え切れなくなつて、思はずそこへ泣き伏した、折柄間の襖を徐に開けて、面を出したのはお管といふ中働きで、

「奥さま、お實家からお使ひでございませぬ」と手に持つて居た手紙を出した。

花江はこれに驚かされて、顔を擡げて涙を拭いて、その手紙を開いて見ると、急に逢ひたい事があるから、此の車で直來るやうに、と只其の事だけを記した父の文であつ

た。
花江の實家は南禪寺のほとり、風流に暮らして居る中林竹翁といのである。

(二十四)

「あのお仲を持つて参つて居ります」とお菅は側から云ひ足した。
このお菅といふ女は、健吉が東京から歸ると直、去る人の周旋で雇ひ入れた中働きで、
年はまだ三十に足らぬけれど、萬事に脱漏無く、如才無く、一家の事を引き構へて働
いて居る、實家は丹波の龜山邊で、親も無ければ同胞も無いやうに云つて居るけれど
一度嫁入して眉毛を落した事のあるのは、その舉動が證明して居る。
父から急に逢いたい用があるとは、如何なる事情であらう、今まで遂にこんな事を云
つて呼ぶにお遣はしなされた事は無いに、侍人を持たして、直に來るやうに、とは私
を獨身者扱ひに遊ばした爲めか、何故か、へ旦那の都合を聞いた上でと書き添へて
は下されませぬ、と心の中の不平不満、一時は肚胸をつくばかりであつた。
然し、父よりの使を無下に返すことは出来ぬ、今まで例のない手紙に、侍まで附けて

呼ぶにお遣はしなされたは、よくく深い事情のある事であらう、旦那の御機嫌の悪
い處へ、こんな事を申し上げるは心無けれど、これも致し方のない事と、漸う覺悟を
定めて、健吉へ事の次第を告げ報すべく庭の外へ出たのであつた。
健吉は面白からぬ胸の曇りを、一もと楓の紅葉の色に晴らさうとでも思ふのか、その
樹の下に茫然と立つて居る、花江は今受け取つた手紙を見て、
「こんな事を云つて見ましたの、私一寸行つて來やうと思ひます」
すると健吉は花江の顔をじろりと見て「さうか」と例にない尖り聲、竹翁からの手紙
を繰返し見ながら「この手紙、お父さんか」
「はい、侍まで持つて参つて居ります、何んだか存じませぬけれど、直歸つて來ます
から……」
「別に急いで歸るには及ばん、緩々へ行つて來るさ」奥齒に物の扱つた詞であつた。
「はい」と花江はおどくして「あの御都合が悪ければ斷つても宜いのでござります
から……」
「切角呼びに越したのぢやないか、お前も行きたからう」

「私、別に……」

健吉はこれを機会に、怪しい証拠を見附けて遣らうと思ふから、故意とらめらぬ體にして、

「行て來なく、私は留守番で澤山だ」

「それぢや」と花江は心に濟まねど「一寸行つて参ります」

健吉は軽く頷いて、泉水の方へ歩を轉した、夕陽は力なく、散り殘る紅葉の上を照らして居る。

花江は神情が知らせるのか、何んとなく後髪を率かれるやうに思つたけれど、自分の頭に悪魔の手が掛つて居ることは知らぬ、外へ行くのでは無いから、羽織一枚着かへたばかりで、白毛の頸巻に手土産の菓子箱一つ、待たせてある俥に乗つて、南禪寺へ向つたのは、もうとつぷりと日の暮れた後であつた。

インクラインを通り越すと、晝でさへも物淋しい、況して夜に入つてからは、猫の兎一疋すら通らぬ松風の間を、心細く俥に揺られて行く、すると路傍の並木松の蔭から黒い外套を着た大男がぬツと出て、

「花江さん、一寸お待ち下さる」と呼び止めた。

(二十五)

花江は意外に驚いて、後を見返らうとしたが勇氣が出ぬ、彼の男は車の前に突立つて

「車夫、一寸待つてくれ」

「はい」と車夫は素直に立ち止つた、

立ち止らずに置いて呉れ、ば好いにと思つたが、もう協はぬ、恐る／＼見ると外套の頭巾を眉深に被つて、手頃の洋杖を抱へて居る。

「花江さん、まア降りて下さい、僕です筆村です」

云つて頭巾を取つた、車夫はその面を燈灯の火を見て、思ひ當ることがあるやうに棍棒を下すのであつた。

花江は筆村と聞いて合點が行かぬ、

「私、急いで歸らねばなりません、もし御用あれば宅へお越しを願ひます」

「花江さん、あなた何處へお急ぎなさるのです」筆村は沈着いた、

「實家へ参るのでござります、車夫さん、急いで行つておくれ」
 「へえ」とは云ふが車夫は棍棒を上げやうとはせぬ、
 「は、ア、お實家へ……ちや貴女は此の車夫の持つて参つた手紙を、御覽にはならなかつたのですな」

「えッ、車夫さんが……」

「あなたをお迎へに上げたのは僕です、まあ安心してお降りなさい」
 花江は急に胸を騒がせて「あなたが……私を……」

「どうです、父よりとして差し上げた手紙は、僕が認めたのです」と筆村は何處までも沈着いて「僕はある意味に於てあなたの父ですからな、少くも貴女のお心を守護すべき責任のある父ですからな」

花江は恐しさに聲が出ぬ、松風の音は蕭颯として、この不幸の犠牲の涙を吹くのであつた。

「……と申し上げたばかりではお分りにならないでせう、僕は筆村正也、貴女は御記憶が無いかも知らんが僕は熟く貴女の事を覚えて居る、花江さん、貴女のお身の上には

今大變な事が起つて居るのですぞ」

「えッ」と花江は愈驚いて「私の身の上……」

「爾うです、悪くすれば貴女のお身の破滅にも爲る事です、然も其の事情を知つて居るのは、廣い世界に、私ともう一人あるばかりです、是れが一面識もない貴女なれば、僕も知らぬ顔で打捨つて置くのですけれど、僕は、實は貴女に對して……忘れる事の能きぬ或る意味を持つて居る、それで何うかして貴女に幸福な月日が送らせたい、貴女の一身を美しく清くしてお進げ申したいと思つて、態々迎ひの車を遣はした、然しあなたは今貴女のお身の上に湧き起らうとして居る、ある大事件を御存じになつて、さうして其の御用意があるのですか、夫れがあれば私は私の聞いたゞけの事に就て、御注意を申し上げて置くに止めるけれど、恐らく何も御存じはないのでせう、貴女の咽喉は或者の手に由て絞められ、貴女の精神は或者の刃に由て殺されやうとして居ることを……えッ、御存じになつて居るのですか」

「ええ、私、ちつとも……」

「御存じ無くば、僕から委しく申し上げる然し立話は能きんから、車夫、この御婦人

を僕の家へ挽いて行け」

「はッ」と車夫は棍棒を上げた。

花江は只おどく」と「けれど私……」

何か云ひかけたが已に業に遅かつた、車夫は宛ら疾風の如く、元来た道を馳せ行くのである、あはれ花江の運命は何うなるであらう。

(二十六)

花江が去つてからの健吉は、何か頭から被さるやうで面白く無い、庭の一隅に咲き残る菊の花も、泉水の汀に散り残る紅葉の色も、自分の心を慰めては呉れぬ、それで其の儘書齋へ歸つて、投げるやうに座つた時始めて右の手に、花江の父から花江へ贈つた今の手紙を握つて居るのに心附いた。其處へお菅が洋燈を運んで来たので、再び手紙を抜いて見た、文は極めて簡略であるけれど、其の中に深い意味が籠つて居るやうに思はれる、沈と見て居る中に「此の手紙の文字と前に尺八から出た手紙の文字と善く似て居るぢやないか」と囁く如き聲が

した、是れにハツと驚いて、熱く見直すといかにも爾うだ、見覚えのある岳父の文字に似せた處に、異い點が二つ三つもある、はてなと思つて、手文庫の中から彼の手紙を取り出して、雙方を引合せて見ると、果せるかな墨色が同一である、特に「花江」と書いた宛名の二字に、争はれぬ所がある、健吉の胸は又騒いだ。

「旦那、御飯を召上つては如何でございます」とお菅が襖を引を開けた。

「お菅」と健吉は更めて「お前に聞きたい事がある」

「えッ、私に」と音濃い返事をして、お菅は膝を前ませた。

「他ぢやないが、お前の目に異つた事が映りませんか、異つた事が……」

「異つた事と申しますと」

「要り花江の身に……」

「えッ、奥様の……」

「花江の身に異つた事がありはせんか尋ねるのだ」

「左様でございますね」とお菅は唇を管めるやうにして「別に異つた事はござりませぬけれど、近頃旦那様のお不在中に、ちよいと御他出遊はす事がござります」

「えッ、僕の不在中だ……」

「はッ」と口を濁らせて「悪ッ處へお越し遊ばすんぢやござりますますしければ……」

「何處へ行く、何處へ」と健吉は故意と平氣を粧ふのであつた。

「例もお實家からお迎ひが参りますぞ」

「えッ、實家から……今日のやうに車を持って来るのか」

「お車を持って参ります時、お手紙ばかりの時もござります」

「然し私は一度もそんな事を聞いた事は無ッ、お前何かの思ひ違ひをして居るんぢや無いか」

「夫れは旦那様、御存じの無ッ等でございます、例も旦那様が御出勤になつてからお出掛遊ばして、三時頃はお歸りでございますからわ」

あはれお昔の返答は、悉く健吉の胸を掻き亂す又手となつた、健吉は洗と考へる。

「然し旦那様、私がかんな事申し上げたのを、奥様へ御内分に遊ばして下さしませ、呉々も口止めされて居るんでござりますからわ」

「諾し假令何んな事情があつても、お前の迷惑になるやうな事はせん」と健吉は洗ん

だ調子を云つて「衣服を出して呉れ、一寸竹林まで行つて来る」

「あら」とお昔は目を圓うして「旦那様、お實家へ行らッしやるのでござりますか」

(二十七)

健吉はもう我慢が出来ぬ、今までは尙多少の信用を花江の上に置いて、面白からぬ間からでも、よもやくと思ひ消して居たのが、不幸にも事實であつて、お昔といふ生きた證據まで出たのであるから、谷口家の體面上、別しては其の身の信用上、此の儘に捨て、置く事は出来ぬ、由つて今から南禪寺に岳父を訪ねて、果して花江を迎ひに来たのが事實か、花江が果して岳父の急用に行つて居るか、第一は夫れを確かめ、もし岳父の詞に異ひべき點があれば、斷然處決して谷口家の體面を潰さねばならぬ、と咄嗟の間に斯う決心したのであつた。

一時間の後、健吉は岳父竹翁と相對して、中林家の小座敷に坐つて居た。

竹翁は白銀の絲を列ねたる如き髯を撫でつつ「いや實に辯解もなき不所業で……」

「ではお父さんからお使ひは無いのですな」と健吉は聞き直つた。

「勿論、迎ひの者などを出した事は無い、もし花江に用があらば、まづ貴下へお知らせする」

「私も爾うであらうとは信じて居たですが」と健吉は愈眉を擧めて「すると、貴下の名を偽つて、花江を呼び出しに來たのは何者でせう」

「貴下お心當りは無いか」

「爾うですな、別に是れといふ……」と云ひ掛けたが意を決して「こゝに斯う云ふ事があります、私は深く花江を信じて居りますので、是れを以て直に彼れの品性を疑ふやうな事は致しませんけれど、今から二週間ほど以前、私の尺八からこんな手紙の出した事があります」と彼の異しい手紙を出して見せて、更に今日の偽手紙と、その手紙と筆蹟の酷く似て居る事を物語つた。

竹翁は健吉から手紙を受け取つて、さうして始終りを讀んで見て「是れは怪しからん花江が斯ういふ者と手紙の往復をして居やうとは思ひも掛けぬ事、萬々一是れが事實であれば、貴下へ對してお詫の致しやうも無い、然し健さん、是れを花江の犯して居る罪惡の證據とするには、餘り出所が突飛ぢやないか、もし是れを花江が秘密に或る

者から受け取つた手紙とすると、貴下の尺八の裡へ秘したのがいかにも異しい、自分の秘密な手紙を、あなたの尺八へ秘して置くのは、要り貴下に向つて大罪を白狀するも同じではないか、私は貴下も御存じの通り、何事にも公平を尊ぶ主義から、娘に最負をするのでは無いが、此の手紙には何か深い事情が籠つて居るのでは無いかと思ひ

貴下のお見込は如何ですな」と考へながら云ふのであつた。

「ア」と健吉は頷いて「私も其の邊に就て多少の疑ひを存しないではありませぬけれどお父さん、火の無い處に煙は廻らぬ此の手紙を何者かの惡戯に原くものとした處で、今日の使は何者でせう、膝下の名を持つて呼び出しに來た此の手紙、これが此の文と同筆であるのがいかにも異しいのです」と他の一通を取り出して見せた、竹翁は又沈と考へて、

「けれど私は娘を信用する、健さん此の手紙に恐ろしい惡意が籠つては居なからうか」

一方に於て花江が悲境に沈むと共に、一方に於いて南小路家の基礎が恐ろしいまでも傾いた。

龍子は例の如く一室に閉ぢ籠つて、人に面を合す事をせぬ、金次郎は云ふ迄も無い、近頃はお松にさへも逢はぬやうにくと心掛ける、この不思議な主従の間へ入つて取次の役を勤めるのは、小間遣ひのお菊であつた。

お菊は今年十六の小娘で、生れは三本木邊といふ事だ、親の何がしが骨董屋をして居た間から、南小路家へは毎日のやうに出入りして居たので、其の縁故から三年前に龍子のお相手として上つたのである、年紀は若いのが伶俐い生れで、其の上容貌も十人並勝れて居る、龍子はそれを眞實の妹のやうに可愛がつて、此の女ばかりは心を置かず側へ寄せるのであつた。

「お嬢様、お嬢様」とお菊は襖の外から呼んで「お乳母とんがお目に掛りたいと申して居ります、如何致しませう」と命を候つた、家内の人から「お乳母とん」と呼ばれるのはお松である。

「私、今日は気分が悪いから……何んの用だか聞いて御覽」と龍子はさるる備げに答へ

た。

「是非お目に掛らねば成らぬ事だと被仰つて、お次に待つて在らっしゃいますよ」次に控へて居たお松は、得意顔に詞を添へて「お嬢様、貴女のお希望の協分時が参りました、夫に就いて是非申し上げねばならぬ事がございます」

「ぢや、逢ひませう」と龍子は始めて晴々とした聲で云つて「乳母、此方へお入り」

「はい」とお松は満足したかの如く答へる其の詞の中にお菊は襖を開ける、床の間に置かれた盆栽の蘭の香が、馥郁として蒸する前に、龍子は紫檀の机を控へて、端然と坐つて居た。

お松は内へ膝入り入つて「お菊とん、用があつたらば手を叩きます」と云つてお菊を見迎つた。

お菊が心得て引き退つた後で、お松は龍子を洗と見上げて「お嬢様、お歡び遊ばせ、貴女のお望みはもう八九分までも成就でございますよ」

龍子は黙つて居た、物を云ふのも煩厭いと云はぬばかりで。

「花江様はもう谷口様の奥様ぢやございませぬ、私の策略は思ふさま圖に中りまし

た」
龍子はまだ黙つて居た、然し此の報告が如何に龍子の心を動かしたかは、彼女の瘦せて尖り勝に見えた面へ、一村紅をさしたのでも分る。

「此の分でとんく拍子に参れば、花江様にお代り遊ばして、貴女が谷口様の奥様に成り遊ばす時が、もう近々に参るであらうと信じられます、私は一日も早く貴女と谷口様との爲に、千秋萬歳が誦ひたいのでございませう」

「乳母」と龍子は莞爾とせす呼んで「お前は是非逢ひたいと云つた用は、其の事を云ふ爲なんだね」

「いえ、左様ではございませぬ、おほい、私餘りの嬉しさを、肝腎の御用を忘れて居たのでございませう」とお松は笑つて、直に又眞面目に成つて「他ではございませぬが、今度は大分お金が必要なのでございませう、お嬢様此の希望の遂げられる事なら、家の財産を悉皆無くしても好いと被仰つた事がありますので、私どうかしてお希望の協をやうにと思ひまして、夫れはく口にも何も云はれ無さ……」

「お前、お金が必要つて云ふの」

「はい、今度は少しく……」

龍子は側の手文庫から錦の片に包んだ實印を取り出して「是れをお前に預けるからね、要るだけ銀行から出してお來で」

「はい」とお松は流石に驚いて「では御印形まで……」「あア」と龍子は沈着いて

「私お錢の事は知らないから、熱く金次郎と相談してね。」

(二十九)

暮れ逝く秋の月は冴えて、南小路家の廣き庭は山茶花ばかりの世界であつた。龍子の室には菊燈の光り明ら、圓き窓の障子の端へ、筆筒の影が人の如くに映つて居る、鐵瓶の湯の沸騰るのから察して、まだ寝もやらず書見して居るであらうと思はれた。此の時庭傳ひに歩み寄つたのは、一身を當家の爲に捧げて、忠義の誠を盡して居る金井金次郎であつた、彼れの大きく底光のする眼は濕んで、しとくと落葉踏む足に力が無い、身には結城木綿の布子に、眞岡木綿五所紋の黒羽織、その上から十年ほど前に流行した縞羅紗の然も色の變て居る外套を被つて、龍子の室の窓近く進み寄つたが、

哀れに咳れた聲で、

「お嬢様、お嬢様」と呼ぶのであつた、

けれど龍子の返答は聞こえなんだ、彼女は此の忠義者を悪魔の如く賤んで、詞を交すのさへも肩とせぬのであつた。

金次郎は續いて「お嬢様、私は金次郎でございます、今日はお嬢様に是非お目に掛りたい事があつて参りました、長くとは申しませんが、只一目——一目だけお逢ひ遊ばして下さいますし」と云つて大地に手をついた、彼れの目からは露のやうな涙がほろほろと零れて居る。

龍子はその血を嘔くやうな聲さへも聞くまいとて、両手で耳を塞いだらし。

「お嬢様は私を悪魔のやうにお嫌ひ遊ばして在らっしゃる、私は夫を知らぬ事はございません、谷口様へ御縁組の出来なかつたのを、私の所爲と思召して、一入お憎しみを遊ばすのも、私は熱く存じて居ります、けれどお嬢様、あなたは當然御當家を御相續遊ばさねばならぬ方でございますよ、他家へお嫁入遊ばす事の能きぬお身で在らっしゃいますよ、私が始めて家内から、谷口様のお話を聞いた時、頭を振つた

のは此の爲でございます、もしお嬢様、貴女はお逝去になつたお父様の御遺言を、お忘れ遊ばしたのでございますか、御先祖代々のお名譽に、泥をお塗り遊ばすのでございますか、私はたゞ貴女のお心をお情無く思ひます、貴女の御信じ遊ばして在らっしゃる私の家内、私の娘、彼等は皆御當家の血を吸ふ蛭でございます、大切な貴女の肉を咬む狼でございます」

此の時「聞かない、私は耳を塞いで居るお前の云ふ事は些とも聞え無い」と龍子は突然聲を掛けた、彼女は矢張この居間に坐つて居たのだ。

「えッ、私の申し上げる事をお聞き遊ばさん、……致し方がございません、貴女は私をお嫌ひ遊ばしても、私は貴女に忠實を盡します、私の爲すべき事は爲します、私の行ふ事は行ひます、……さうしてもう貴女にはお目に掛りません、私は今夜を限り遠方へ立ち去ります、目に悪魔の姿を見、耳に悪魔の囁きを聞くのが煩厭さに、私は今夜限り御當家を立ち去ります然しお嬢様、私の精神、私の魂は貴女のお傍を放れません、きつと貴女のお身を保護します、今後何ういふ場合にも、貴女のお側に私の在ることをお忘れ遊ばしません、左様なら、……是れでお別れ致します」

云つて僅に身を起した、樹末は風に鳴り、苔の露は星に輝いて、夜は寂しう深げ渡つた。

(三十)

「お父さんは何うなすつたでせうねえ」とそよ子は消魂しく叫んで「昨夕から姿が見えませんが」と母のお松に意を注げた。

お松は長火鉢の前に坐つて、小さい算盤を弾いて居たが「恰と好いや無いか、お父さんが内だと面倒で可けなすよ」

「何處へ行つたのでせうねえ」

「何處へ行く處があるものかね、甚でも打つて夢中になつて居るのだらう」

「だつてお母さん……」

「お父さんの居ない間と思つてね、今次郎さんを銀行と登記役場とへ遣つたの、こんな時、絞り上げるだけ絞つて置かないと後悔する時があるからね」

「次郎さんはお嬢様のお金を出しに……」

「もう銀行にだつて澤山はあるまいから、不動産を悉皆抵當に入れやうと思ふの、爾らすれば三萬圓や五萬圓の金はあるから、私とお前と一生涯食ふに困るやうな事は無からうからね」

「夫れも爾うですね、お父さんは、好い時留守に爲りましたのね」

云ふ處へ次郎は息を切つて駆け戻つた、流行を逐た背廣の脊後から、ぼつくと湯気が立ちあがるな、襖を開けて、

「奥さん、駄目です、銀行の當座預けは、もう二三百圓を餘して居るのみです」

「えッ、そんな事は無い筈ですよ、私も確な計算はしませんけれど、まだ五千圓や八千圓は残つて居るに異ひありません」

「處が無いのだ、貴女の想像に間違ひがあつても、銀行の帳簿に間違ひは無い」

「爾うですかねえ」とお松は吐息を吐いて、

「どうしたのでせうねえ思々し」

「夫れにまだ驚いた事がある、南小路家の不動産全部は扶桑銀行の擔保に入つてゐる、然も三番まで……」

「えッ」とお松は面の色を變へて「まア何うしたのでせうねえ」
「何うしたのか知らんが、南小路家の名を持つては、千圓の金も融通する事は能きないよ」

「どうもこんな不思議な事ありません、全體誰が抵當に入れたのでせう」

「僕が夫れを知らう筈は無い、其處でさし當る必要は、筆村へ遣る謝禮の金——どうして三千圓は無ければならんが、奥さん、貴女のお手で御都合が附きますか」

「私の手で……」とお松はそよ子と顔を見合せて、

「三千圓といふと大金ですからね」

「夫れぢや筆村へ何うして謝禮します、彼までに働かせて、今更約束を反古にする事は能きない、第一僕が困却する」

「どうか都合の附かないものでせうかね、良人の印形とお嬢様の印形とで、少し位都合の附きさうなものですなえ」

「夫は附くさ、信用で借りる日には必然附くさ」

「信用と云ひますと……」

「利息は高いが無抵當で借りるのさ、」

「ぢや夫れで都合附けやうぢやありませんか」

「お嬢さんは、怒りや爲なからうか」

「怒つたつて關ひませんわ、お金の要るのは始ツからの約束ですもの」

次郎は頷いて立ち去つた。彼れの懐には龍子の實印と金次郎の實印とが藏められて居た。

(三十一)

あはれ花江は筆村正也の爲に強迫せられて、同人が河原町の家へ伴はれたのであつた、正也は全然の獨身者で、家には耳の遠い雇婆さんがあるばかりである。

六疊の座敷に、洋燈の火を明らして、正也は儼然と坐を構へた。

「奥さん、貴女は心の底から谷口君を愛して在らッしやるでせうな」
其の前に悄れ返つて坐を占めた花江は、洗んだ力の無い聲で、

「はい、夫れは被仰る迄も無く……」

「然らばお訊ねするが、貴女谷口君の爲には、一身を犠牲に爲さるお心でせうな」
 「勿論、夫れを心に誓つて居るのでございませう」と花江の聲は始めて判然とした。
 「宜しい、其のお覺悟があつてこそ、貴女は谷口夫人たるの資格を具備して在らつしやる、私は仔細あつて二三度も谷口君と相識して居る間で、亦或る事情の爲に谷口君の周圍に纏つて居る總ての事實を識つて居る、實は今夜貴女を此處へ御案内申したに就ては、私にも深い考へのある事で、貴女にも非常の覺悟を爲て戴かねばならぬ意味があるのです——只今お話しますから、まアお茶なりとも喫つて下りな」
 正也は悠然として煎茶を備めるのであつた、花江は心配のうらた、
 「私は先づ貴方のお談話を承らうと存じます、主公は谷口の御朋友で在らつしやうませうけれど、私はまだお目に掛つた事がございませぬ」
 「如何も御道理です、私は或る恐しい事情——谷口君の周圍に纏つて居る、或恐しい事情を善く知つて居りますから、夫れ先お話し申さうと思ひます」
 「は」
 「は」と花江は驚いて「恐しい事情と申しませう……」
 「一口に云へば谷口君に大敵があるのです、谷口君に少しの過失でもあれば、其の處で

突き入つて、引轉さうとして居る恐しい敵が、然も二人までもあるのです、私が谷口君の爲に憂へて居るのは此の點です、貴女些とも御存じ無いでせう」
 「えッ、谷口に……」と花江は稍急ぎ込んで「そんな恐しい敵があるのございませうか」
 「有ります、然も二人まで……」
 「そ、夫れは誰でございませう……」
 「いや、貴女の御決心を承つた上で無ければ、迂闊に姓名は申し上げられません」
 「私の——決心と申しますと……」
 「外ぢや無い」と正也は詞に力を入れて、
 「貴女命をお捨てなされるか」
 「えッ、命……」
 「爾うです、谷口君の爲に、命と名譽とをお捨てになりますか、——要り夫れだけの御決心が貴女にありますか」
 「はい、夫れはもう、その事情の如何に由りましては——良人の爲になる事でござい

ますならば、私、決して命を惜しいとは思ひません」
 「夫ならば宜しい、美事にお捨てなされるのですな」
 「私、僞言は申しません、神々にお誓ひして申し上げます」
 「宜しい、ならば申し上げますが、谷口君が恐しい敵を持つに至つたのも、其の原因は貴女にありますぞ、貴女の爲に谷口君は恐しい敵を求めたのですぞ」

(三十二)

自分の爲に良人が恐ろしい敵を有つて居ると聞いた時は、花江の顔に云ひ知らぬ悲しみの色が浮かんだ。
 正也は語を次いで「貴女は御存じが無いかも知れぬけれど、貴方がまだ高等女学校の生徒として、南禅寺のお宅にお在なすつた時、貴女の爲に思ひを惱まして居た男が二人あつた、其の中の一人は地位も相當で、多少の財産もあつて、今では或會社——谷口君が出勤して居る或會社に非常の権力を持つて居る人なんです、是れが去る人の口入で、貴女のお父様へ、貴女を嫁に欲いと云ひ込んだ、お父様も萬ざらお心が無いでは

無かつたかして、直にお断りを爲さうなんだ爲に、其の男は既う話の出来た者として用意をした、友達にも話をした、夫れが何う云ふ間違ひか、突然谷口家へ御縁組になつたので、其の人は非常に落膽した、落膽の極は悲痛に陥り、悲痛の極は怨恨となつて、何うかして谷口君の地位につちを附けやうと運動して居る、夫れが然る谷口君の従事して居る會社の重役に關係があるものだから、此の儘打捨つてお置きなすつては如何な結果に爲らうも知れぬ、ですから僕は貴女の名譽を犠牲にしても、谷口君をお救ひなさるが宜からうとお勧め申すのです」と眞しやかに云ひ立てた。
 花江は悲しげに聞いて居たが、小さい胸に後前を考へる餘地も無かつた。
 「すれば、何うすれば好いのでございます」
 「要り其の人は谷口君を憎いので無くて、貴君と谷口君とが睦まじく爲すつて在らっしゃる、其の夫婦間が憎いのですから、もし貴女が眞に谷口君を救はうといふの心があれば、谷口君の許を去つてお了ひなさる他ありません」

「えい、私が……」
 「谷口君とお別れになるのです、元の他人にお爲りなされるのです」と正也は判然と云

つて直に聲を潜め、「夫れを谷口君は既う心附いて居る筈です、ですから貴女に對する舉動が近頃は餘程變つて居るでせう、以前の如く貴女に満腔の同情を捧げては居ないでせう、ねッ、あなたお心附きは有りませんか」

斯う云はれて見ると、花江の胸に幹々思ひ當る事がある。

「谷口君も貴女よりは地位が大事ですから、人に勝れて利發な人は、地位の爲に愛情を捨てるのを何んとも思つて居ませんからなア」と正也は又云ひ足した。

花江は沈と垂頭して居る、其の眼の中は満幅の涙であつた。

「ですから私は切に貴女に注意するです、一日も早く谷口君とお別れなすつて、一は谷口君の地位を安くし、又一は貴女夫れ自身の身をお守りなさるやうに……」

花江は女心の迷ひ易くて、咄嗟の間に此の一大事を決するだけの勇氣は無かつた。

「どうです花江さん」と正也は又云ひ迫つて「他人の僕でさへも、谷口君の才名を惜むが爲に是れほど氣を揉んで居る、奥さんで在らッしやる貴女が、夫れを餘所に見て、何日まで纏綿して居らッしやる筈は無いちや無いですか」

「はッ、ですけれど……」

「熟く考へて御覽なさい、僕は決して貴女や谷口君のお爲に爲らぬ事は云ひません」

(三十三)

夫れより三時間の後、花江は良人の家へ歸つて居た、健吉も恰と竹翁の許から歸つた處で、さう不愉快さうに机の前に坐つて居た。

「只今」と花江は何氣無く云つて、悄然と座に着いた、健吉は物も云はぬ。

「誠に遅くなりまして済みません、色々込み入つた話がございますので……」

「お前」と呼んだ健吉の聲は傾へて「今頃まで何處をほつき歩いて居た、何處を……」

「はッ……」

「はッでは無い、お前は實家へ歸つて居や爲ないぢや無いか、お前のお父さんは、お前の處へ迎ひを出した事は無いと被仰る」

「はッ……」

「夫れが今日ばかりでは無い、お前は今日までに三四度も怪しい迎ひを受け、私の出勤中外出した事があるぢや無いか」

是れには辯解があるらうしう面を擡げたけれど、夫れを云ふ暇も無く悲嘆の情に閉ぢられた。

「お前は何んと心得て居る、お前の胸に神聖な夫婦の情といふものは無い、お前は確に谷口家の平和を破らうとして居る、谷口家の神聖を穢らうとして居る、全體今日お父様の使者と稱して、お前を迎ひに来た者は誰だ、私はまづそれから聞きたいのだ」

花江は悲しさが込み上げて、遂にハラ／＼と涙を溢した、自分は當家を去るのは、良人の身を安くする爲、谷口家の名譽を維持する爲、止むを得ぬ義理合からと諦めては居るものゝ、良人の恐ろしい疑念を受けながら、その辯解をすることゝ爲らず、本意無い別れをする事かと思へば、寧ろ此處で、良人の前で、良人の家で舌を嚙んで死に度く思ふ、然し一縷の頼みの綱は、意を決して筆村の家を去らうとする時、正也の口から「僕が悪くはしないから、一時谷口君を思ひ切つて僕の家へ寄留したまへ、それで谷口君の敵が谷口君に好意を表するやうになつたらば、僕が一命にかけても、必然再縁させて見せる」と云はれた一言である、正也にそんな心切無く、そんな熱情の無いのは知れて居るが、あはれ花江は彼れの甘い口に乗せられて、彼れを二ないも

のと信じて居るのであつた。

健吉は花江が抄うし返事せぬのを見て、愈々不愉快さうに又口を切つた。

「お前は何故返事をせん、お前には今最も穢はしい疑ひの雲が掛つて居る」

「は」

「は」と花江は漸く決心して「私もう……主公のお氣に入るやうにできません」

「なに」と健吉は語鋭う「ぢやア何うするお前は私を捨てる氣だな」

「いえ、爾うではござりませんけれど、私のやうな者、とても主人のお氣には入りませんから」と宛ら血を絞る如く云つた。

「ぢや、離縁しろといふのか」

「は、ではござりませぬけれど……」

「うむ、諾し、お前の心はその一言で知れた、お前はもう人間の仲間ぢやない、お前の心は獸にも劣つて居る」

花江は悲しさに涙の面を擡げて「いえ、是れには……」

「色々理のある事を語らうとした時、門前で高い口笛の響きがした、正也が花江の決心を助くべく、この門前へ窺ひ寄つて居るのであらう。

これを聞くと共に、花江の覺悟は又強うなつて「どうもあなたに遊ばして下さいますし、私もう……と……」と後は涙に閉ぢられた。

(三十四)

斯て谷口夫婦の間は破れた、健吉は飽くまでも花江を疑ふが故に、到底終生の苦樂を俱にすべき婦人ならずと諦めて、立派に離縁状を書いて與へた、花江は白刃を握る程の心持で夫れを抱いて、悄悄と筆村正也の許へ引き取つた、彼の女が父の許へも歸らず、正也の許へ身を寄せたのは、彼れを信する事の極めて厚きと、此の事件の落着いた後、自分の身に些の濁り曇りも無い事を正也の口から健吉へ證明して貰ふ時機が、晩から早かれ来るものと信じたからであつた、花江が健吉の許を去つた事は、正也の口から次郎に通知せられ更に次郎の口からお松に通知せられたのであつた、由でお松は鬼の首級にても取たやうに是れを龍子に囁き知らすべく、龍子の居間を訪れた、龍子は例の書齋の下に、黙然 考へに沈んで居るのであつた

「お嬢様、お歡ひ遊ばせ、貴女のお望みは協ひましたよ、花江様は谷口様を御離縁に

なりましたよ」

得意顔には云つたが、龍子は嬉しうな風も見せぬ。

「爾う、夫れは不憚さうだつたね」

「まア眞個に、彼の生木を引き裂くに、佐久間さんは、何の位骨を折つたかも知れませんよ、最も是れには種々な人も遣つて、種々な手段で運動を爲すつて在らっしゃいますから、随分お金も要て居ります、然し貴女のお望みの協つたのが、私何よりも嬉しうございますわ」

龍子は只點頭くばかりであつた、お松は重ねて、

「そんなですから、澤山お金をお遣はしにならねばなりません」

「幾許でもお進び申して呉れ、夫れだからお前に私の剣が預けてあるぢやないか」

「おほい、お嬢様、何んでございますよ貴女の御判が金を生む時代は、既う疾に過ぎ去つて、貴女の預金は悉皆空になつて居りますよ」

「おや、爾う」と龍子は澄ました物であつた、

「夫れに御當家の地所家屋、其他の不動産も二番三番の抵當に入つて居りますから、今

「ちや百圓の金を借りる先もございません」
「無い物は仕様が無いわねえ」

「けとも佐久間さんに彼れ程の骨を折らせて、打捨て置く理には参りませんわ、此の上は仕方がありませんから、貴女のお衣服、夫れからお指環、お髪のお物、そんな物で融通を附ける外無からうと思ひます」

「私の物、何んにも要らない、悉皆賣ても好いのだけ」

「ちや致し方ありませんから、一時お賣り拂ひが好うございますわ、然し私には當世の眼がありませんから、そよ子を呼んで見せる事に致しませう、お菊どん、お氣の毒だが一寸そよ子を呼んでお呉れ」

お菊は先刻から此の場の様子を聞いて居たのであつた。

頓てそよ子が来る、お松の計ひで金に飽かせた、龍子の衣服調度を、次の間へ持ち運ばせる、綾錦の衣装、金、寶石の指環、釵安價に踏んでも幾千圓の物はあらう、そよ子は夫れを手當り次第に檢めて「是れは私に似合つてよ」「是れを私に買つて頂戴な」と、傍若無人な言を云ふ。

けれど龍子は見向いても見ぬ、お菊は側に只一人無念の涙を呑むのであつた。

(三十五)

南小路家の爲に忠勤を勵んで居るやうに見えたお松は、甘きに附く蟻であつた、龍子の手許に甘い汁の無くなつたのを知ると共に、三代相恩のお主の家を放れて、六角堂邊の風流な家へ引き越した、お松でさへ爾うであるから他の雇人は云ふまでも無く、一人去り、二人去りして、遂に悉く龍子を見捨て、了つた。

然し龍子は平氣で居る、壁が傾れても、柱が歪んでも、明日食ふ米の用意が無くても幾萬圓の主であつた時の様に無頓着で、朝から晩まで書物ばかり見て居る、この憐れな世馴れぬ主に、相も變らず忠實しく事へて、悪い面一度見せたことのない女が只一人だけあつた、夫れは他でもない小間使のお菊である。

収入は一文も無く、補助者は一人も無い、昔の豪家の零落家であるから、米櫃の空になる事もあらう、小使錢の盡きたる時もあらう、けれどお菊はそんな言を龍子の耳へは入れず、何處で何う工面して来るのか、兎も角も飢渴い目をさした事は無い、世に

「世界にもこんな忠義な者が又と一人有るであらうか。お菊が苦い忠義の間に、その年の秋も暮れて、ちうくと早咲きの梅の香が匂る頃となつた。」

恰とお菊が買ひ物に出た後であつた、佐久間次郎が洋服を着て訪ねて来た。

「お嬢さん、相變らず御勉強ですね」と次の間から聲掛けた、誰も取次をする者が無いから、案内も乞はずこゝまで上つて来たのであつた。

然し龍子は見向いても見ぬ。

「お嬢さん、佐久間次郎です、どうも久しく御無沙汰を致しました。」

再び云つたが返事も無いので、すつと通つて、龍子の側の火鉢の前に座を占めた、縁の缺けた箱火鉢に、炭團が一箇埋めてあつた。

「これは甚い、此寒いの此火では遣り切れ爲い、お嬢さん、お召使は何うしました」と次郎は四邊を見廻した。

「誰も居りませんのでござります」

始めて口を開いた龍子は斯う答へるのであつた。

「誰も居らないのですか、……誰も彼もお嬢さんを一人捨てて行くといふは實に甚い事をするですな、聞けばお松さんとそよ子嬢も、六角邊へ轉宅したつて云ふことですな、御當家の柱石とまで信用せられた金次郎は家出をする、其の家族はお嬢様の此有様を見捨て、美しい家へ移轉する、實に人間ほど頼みに爲らんものはありませんな、世話に爲る時ばかりは頭を下げて、少し自分の地位が出来ると、その恩人に白刃を向けやうとするのが當世ですから、お松さんばかりを責めるのぢや無いが、實に甚い理ですな、お嬢さん、あなたお一人でお困りなされるでせう、何うです、暫く私の家へ來ませんか——狭くはありますが、決して御不自由は爲せません、ねえお嬢さん、爾うして徐に善後策をお講じなさい、斯うして此處にお在なされる内には、此の家屋敷も債權者の手へ渡つて了ひますぞ、すればあなた、廣い世界に身を置く處も無いやうに爲るぢやありませんか」

次郎は熱心に説き立てる、龍子はたゞ無言であつた。

次郎は云ふ丈の事を云つて、暫らく龍子の様子を見て居たが、龍子は耳を傾ける様も無く沈として居る、其處で更に一步を進めて、

「お嬢さん、物は相談ですが、何うでも私の家へ来ませんか、私も獨身ですから、貴女のお考へ次第に由つて、いかな楽しい家庭を作る事もできます、さうして私——實は其の……貴女もお察しではありませうが私が今日まで獨身で居る……に就いては貴女に十分の御同情を乞はなければ為らるのでございませう」と茲に始めて心の丈を仄したのであつた。

龍子は耳を掩ふが如く突と立ちて、縁端から庭へ出やうとした、次郎は其の裾をきつと抑へて、

「あなた、私の詞に耳を貸しては下さらないのですな」

「何うかお放しなすつて……私肥た狐の妻となるよりは、瘦せた梅を友として終ります」

「ぢや私の云ふことがお解りには為らぬのですか」

「もう貴郎へお答へする詞を有ちませせん」龍子は必強く云ひ切つて、抑へられた裾を

裾と拂つたが、其の儘片足を縁から下ろした。

「龍子さん」と呼んだ次郎の聲は激して「貴女には用がある、貴女は私に義務を有て

在らッしやる」

龍子は再び元へ歸つて「義務と被仰るのは……」

「私は貴女の債権者である、貴女に三千圓の貸金がある、お忘れは無いでせう」

「些とも存じませせん」

「貴女は御存じが無くつても、貴女の實印と、貴女の後見人たる金次郎との實印が知つて居る、私は貴女の御返答次第で、最後の手段——強制執行を遣る心算で、執達吏までも同道して居る、貴女の御返答に、もし些少の花でもあれば、私は證文に裏斗を付けて貴女の手へお返し申す心算で居た、けれど只今の御返答を聞き、只今の御様子を見ては、もう貴女に同情すべき餘地が無い、由て直に最後の手段を決行します、すれば貴女は今日から當家にお住みなさる事も能きず、三界に家の無い乞丐同様のお身に為りなさらねば為りませんで——宜しいか夫れでも宜しいか、貴女は自分の恥よりも御先代の御恥辱をお考へなさるが至當ぢや無いですか、南小路家の正嫡たる貴女が、

「盤纏を下げて人の軒端に立つ、夫れが貴女の御名譽でせうか、いや、南小路家の御名譽でありませうか、貴女は今危急存亡の秋に際んで在らっしゃる、夫れをお救ひ申す者は、廣い世界に斯く云ふ次郎の他ありませんぞ、もしお嬢さん、貴女は何故弘誓の船をお捨てなさる、私の胸にある同情の波は今貴女を載せやうとして待つて居る、夫れをも捨て、願みやうとは爲らんのか」

龍子は儼然して「現世に同情はありません、心切はありません、血も涙もありません、世界の人類は悉く悪魔です、血を吸ひ、肉を咬ひ、情を殺し、愛を奪ふ、憐れ無類の悪魔ばかりです、私は血と肉とを悪魔の犠牲にして、さうして心に夫等の悪魔を呪ひます、私に家の必要はありません、良人を持たうとは思ひません、貴郎のお作りなすた私の義務は、貴郎の手で御處分なさい、もう何事も云ひません」

斯う云ひ放つて龍子は庭の外へ出て行つた。惘れなる次郎、其の背後には執達吏が立つて居た。

健吉は龍子の心の底を察したるらしく、暫くして「だつて夫れでは御不自由でせう、人間一生を家も無く金も無く糾累も無く渡る事は能き無い理です」

「家はありますわ」と龍子は濟ましたもので「山の奥には茂つた樹が、我々の舎を作つて居て呉れますわ、別に金はございませんでも、山には樹の根や樹の芽が、十分の慈悲を以て、私共に食餌を給して居て呉れます」

「けれど貴女、猿や猪のやうに山中の生活も出来なからうぢやありませんか」

「いえ、私は慾の深い人間よりも、猿や猪の方がとんなに正直だらうと思ひますわ、猿や猪に虚欺はございませぬ、恐しい思はじい策略は致しますませぬ」

「ではありませうけれど……」と健吉は猶服し難ねた様であつた。

「私、只今御門前を通り掛りますと、懐しいお笛の音が致しましたので、其の儘お尋ね申したのでござります、斯うしてお目に掛れば、もう思ひ置く事はございませぬ、人間も戀しいとか懐かしいとか云ふ情意の動く間は、十分解脱して居るのでござりますわねえ」

龍子は斯う云つて起ち掛けた、此の間に日はとつぷりと暮れて、ぼろ／＼時雨の音も

聞えた。
健吉は引き止めるやうに「まあ好いぢやありませんか、別に御用がなければもう少しお話しなさいまし」

「いえ、長居を致しては人の口が煩厭うございますから……貴郎、御機嫌よく遊ばしませう」

幾許止めても止まらぬのが龍子の特質であつた、健吉とお菅とに送られて、雨の中を傘もささず門前へ出て見ると、お菊は寒そうに待つて居る。

「お嬢様」と魂消しう「只今外套を被つた春の髙い方がお出でになりました、お前は南小路さんのお召使かと有仰いますから、は、と云つてお答へ申しますと、夫れでは是れをお嬢様にお進け申して下さると云つて、此んな物をお渡しになりました」と一封の手紙を出して見せた。

龍子は手にも取らず「お名前を聞して置いたのか」

「は、お尋ね申しましたが、此の中に書してあるとばかり被仰つて……」
「開けて御覽」

「は、」とお菊は心得て封を開いた、裡には百圓紙幣が一枚と、小さい紙片とが入れてあつた。

「お嬢様、お金でございますよ」とお菊は驚いて「まあ何處の方でございますやう」

龍子は紙片のみを手にとつて見た、夫れは鉛筆の走り書で、

『私は増井勉と申す者に候、曾て筆村正也と共に御尊宅へ参つて八百圓の御無心を申したる事御座候、私は其の中の二百圓を分配せられ夫れにて或る業に従事したる結果、唯今にては一人前の人間となり候、御恩の千百萬分の一を是れにて報じ候心に候、御笑納下され度候早々』

と斯う書いてある、お菊はいそ／＼して「まあ優しいお方で在らっしゃいますことね、お嬢様是れで……」

と云ひ掛けるを龍子は遮つて「私、人から恩を返されやうとは思はない、此の人は何方へ行つたの」

「二條橋の方へお行でになりました」

「夫れぢやお後を追ひ掛けやう、急いで行つたら知れぬ事も無からうからね」

雨の中をしとくと歩いて行く、お菊も尾に續くのであつた。

(三十八)

其の日から龍子の行方は知れぬ、一切の家財家具は悉く執達吏の手に由りて公賣せられた、龍子がまだ果敢無い戀を頼む間は春めき榮えて居た南小路家も、今は雀の宿となつた。

龍子は何處へ行たであらう、龍子よりも南小路家の盛衰をのみ念とした忠義者の金次郎は、此の大事變を知らぬのであらうか。

唯不思議なのは、三番四番の抵當に入つて居る筈の南小路家の家屋地所に、誰も手を附つけぬのである、主の行方は知れぬけれど、此の家此の屋敷はまだ龍子の所有であつた。

南小路家がこんな様に衰へ行くのとは正反對に、お松の家は榮えに榮えた、彼れの新宅は六角堂の邊で、そのみ廣くは無いけれど、風流を旨として建てられた一構へであつた、家には上女中、小間使、下女中、その子はお嬢様、お松は奥様、さうして彼等

の手や頭に飾られた櫛、釵、指環は悉く龍子の物であつた。

お松の家がどうしてこんなに富んで居るかは、今改めて云ふまでも無い、お松その子の口から、一度も三代相恩の御主人たる龍子の噂を聞かぬのにも、彼等母子の心情は察せらるゝ。

斯うなると婿が必要である、金、衣服、指環に満足したその子は、急に戀の飢渴を覺えて來た、一日お松は次郎を呼んで此の事を仄かした。

「次郎さん、あなた何故奥さんをお迎へなさらないの、お一人では不自由ぢやありませんか」と遠い處から持ち掛た。

「廣い世界に私の妻にならうといふ變り者は無いですからなア、早い話が龍子さんのやうに逃げられる人ばかりですからなア」

「だつてお嬢様は貴郎が無理ですわ、聞くまいと思つて耳を抑へて居る人に、いくら好い話をしたつて、聞く筈はありませんわ」

「だからさう……」

「夫れよりもね、牛は牛連といふ事がありませんからな、寧ろ家のその子を奥さんにし

て頂戴な、容貌は御存じの通り十人並ですけれど、財産は三萬圓ほどありますよ」
 次郎は餘りそよ子を好いて居らぬのである、只そよ子のみの相談ならば、次郎が龍子を
 説いた時の如く、微塵も耳を貸さなうけれど、夫には三萬圓といふ金が附
 いて居る、戀に失敗した彼は、切て此の三萬圓を我の有として、慾で満足しやうとの
 心が浮かんだ。

「けれど奥さん、そよ子さんは獨娘ぢやありませんか」

「ですから、差上げる理には参りません、……と云つて貴郎を私共見たいな者の家
 へ、養子に来て戴く理にはなりませんから何方が何うとも附かず、私方へお來で下
 さいましな、其の上で子供でも擧げた時、夫に後を繼がせるとも、相談の致しやうは
 幾許もあるぢやありませんかねえ、それに貴方、御次男で在らつしやるぢやありませんか」

「次男ではありませんが、(男子として他姓を冒ぐのも意氣地が無いですからなア」

「ぢや、佐久間さんの御次男で以て、私方へお來で下さいまし、ねッ、さうなれば
 そよ子も、どんなに歡ぶか知れません」

人生の一大事といふ、二人の婚禮は、こんな無雜作な事で話がついた、さうして次郎
 とそよ子とが、兎も角も合卷の盃を擧げたのは、龍子が家出してから一月ほど経た
 後であつた。

(三十九)

龍子は住むに家も無い、龍子は被るに着物も無い、龍子は食ふに飯も無い、然し家よ
 りも尊い或る覺悟は有て居た、着物よりも貴い美しい精神を有て居た、而して龍子は
 龍子にばかり有つて、世界の誰も有て居らぬ忠義者のお菊を有て居た。

實にお菊はその小さい身體と、清い氣高い心とを龍子に捧げて、此のみじめに憐れな
 お主を守護し介抱するのであつた。何處と當も無く日の中は市中市外の處々を歩き廻
 つて、夜は行き當りばつたり、神社の軒や、寺院の山門に寒い夢を結ぶ頼み無いお
 主をお主として、片時も側を離れず、出來るだけの慰安を與へやうとするのであつた、
 龍子が今日までも飢ゑ凍えず、襦袢は下けても命に恙なく經て來たのは、全くお菊
 の才覚に由るのであつて、お菊は龍子の家來であつて、更に龍子の神様、龍子の金主

龍子の看護人であつた。

今日も龍子はお菊を伴れて、とぼくと日の暮れ近い市の中を歩いて居た、すると只ある家の中から、清しい尺八の音が聞えたのであつた、其の響が耳へ入ると共に、はたと歩みを止めて了つた。

而して暫く笛の音に聞き入つて居たが、即ち曲の終るを待つて、徐ろに頭を擡げた、家の入口には『谷口寓』と標札が掛けてある、龍子の顔は急に色めいた。

「笛の音に聞き覚えがあると思へば、やつぱり谷口様のお家なのよ、眞個にお懐しい私一寸お目に掛るから、お前こゝに待つて居てお呉れよ」とお菊を見返るやうにして云つた。

「はい、お待ち申して居ります、どうか御緩々遊ばして……」

龍子は敵れ掛けた肩掛に、雨と露との痛みを受けた縮緬の羽織、色の變つた絲織の小袖、板の如く履き減らした下駄を鳴らして臆面も無く玄關へ掛つて、徐に案内を乞ふのであつた、執次に出たのは下女のお菅「御主人に御面會が願ひたい、私は南小路でござります」と立派に名乗つた。

お菅は此の事を主人に通じ、健吉は最愛の花江に別れてから、淋しさと戀しさと、情なさど形無さゝに快々として少しも樂まぬ、間があれば尺八を玩んで、夫れに多少の煩悶を遣つて居た、其處へ龍子が來たと聞いて取敢ず座敷へは通したが、彼れは龍子の姿の變つて居るのに、驚きもし憫れもし不覺に眼を睜るのであつた。

「どうも御無沙汰を致します」と龍子は自分の境遇の變つたのに、氣も置かぬ如く云つて「あなたお變りはございませぬか」

健吉は何と云つて挨拶をして好いか分らぬ、暫くして、

「いや、變らぬ處ではありませぬ、私の境遇には非常な變りがあつたのです、人間も一度龜裂が入ると、勇氣も剛氣も沈んで了ふものですな」

「私爾うは思ひませぬ」と龍子は更に沈着いて「人間の身に最も煩厭いのは、世の中か云ふ或る一種の關係ほど、否な物はございませぬわ、けれど私、幸ひに夫等の羈絆を悉皆絶て、今は眞の一本立になりましたから、始めて心が爽然致しました、人間も、身分も、地位も、戀も、お金も、家も希望も、皆な捨て、了ひますと、恰でお日様

見たいに、公明正大な心持になるものでございますね、私今度始めて實見致しましたわ

(四十)

日は暮れる、雨は降る、寒く身を切るやうな風は濡れた衫を吹きまくる、此の間を傘もささず、全身しと濡れ風の如くなつて龍子とお菊とが二條の橋へ差し掛らうとする時、下手にがやくと人の聲がして、夫れが此方へ近附いて来る、龍子は思はず歩を止めて何事かと見ると、見覚えある佐久間次郎が、温さうな外套に、緞の襟巻、蝙蝠傘に半身を掩うた片手は美しい十五六の舞妓の手を引き、二橋條の西詰を木屋町から三本樹の方へ行くのであつた、お菊も驚いて「あれお嬢様」と袖をひかへる。すると其の背後から五六人の藝妓花車が孰れも酒に食ひ酔うた體で千鳥足で追ひ掛けて来て、危く龍子に突き當らうとして、又がやくと走馬燈のやうに行き過ぎて了つた、お菊は後を見送つて、

「佐久間さんで在らッしやいましたわ、ねえお嬢様」と夢のやう云つた。

龍子は是に答へも無く、雨の中に佇んで茫然と、彼等の後姿を見送つて居る、身は零落て袖に涙の掛る時、一度ならず二度までも戀を囁かれた佐久間次郎が、こんな全盛を盡して居るのを見た龍子の心は何んなであらう。

無言のまま再び歩み出して、二條の橋へ掛らうとする時、又下手に人の歩音がして、

「貴郎、何處へ行くのですよ、貴郎、貴郎、貴郎」と感走つた女の聲であつた。

龍子は又歩を止めた、ぼんやりと立つ硝子燈の光りに透して見ると、次郎の妻になつた筈のそよ子が、髪は亂れ、顔の色は青ざめ、美を盡した小袖羽織は、雨と泥とに濡れて汚れて、宛ら半狂亂の如くになつて「貴郎、貴郎」と叫びながら、次郎の後を逐ひ掛けるのであつた。

お菊は又驚いて「お嬢様、そよさんでございませすよ、まア、何うなすつたのでございませう」

「飢ゑた獸が、奪られた肉を奪り返さうとして叫くのさ」と龍子は快げに笑つて、

「雨は斯ういふ時に降る物と見えるわねえ」

「恰で狂氣のやうでございましたわ」と云ひながら天を仰いで「お嬢様、何處かお宿

を定めやうではございませんか」

「爾うね、増井さん何處へ行つたか知れないのだねえ」

云つて立つて居る膝下へ、見る影も無い年老つた女乞丐が匍ひ寄つて、

「結構なお嬢様、難儀な不具者に、どうか一文お遣りなすつて下さいまし」

龍子は沈と見て「お前は家がないのか、」

「はい、家も御飯も、身寄も亭主も持ちません」

「夫は不憫さうだね」と龍子は忽ち同情して、お菊の手に委せて置いた彼の百圓紙幣

を受取つたが「さア是を進げるよ」と封のまゝ手渡した。

お菊はびつくりして「あれ、お嬢様」

「年を考て不憫さうぢや無いか」と龍子は例の澄ましたもので、憫れて目を圓うする

女乞丐を見返りもせず「お菊、さア行かうね」

(四十一)

浴東醍醐の梅は、今日頃が恰と見頃であつた、土地が幽であるだけ、夫だけ花に情氣

がある。

稚き老たる梅樹の下を逍遙して、満身に清き香を浴びつゝ、今しも只ある藪簾茶屋の

前に出たのは、彼の筆村正也と、健吉の元の妻の花江であつた。

花江は見る影も無く雲れて居る、曾て此の花の如く美しく品好く優しく清らかであつ

た姿は、憐れにも散り失せて、今は色も香も空しいのであつた、面には淡化粧、濃い髪

は例のハイカラ巻にして、衣裳も流石好いのは着て居るけれど、少しの活氣も無く、

少しの風姿も認めぬ。

「花ちゃん、其處で一服ませう」と正也は故意と寄り添ふ如くして「貴方、お草臥

れでせう」

「いゝえ、些とも草臥れやしませんけれど」と花江は水の切れた花の如く悄れて「只

今お話し申したことを何うか早くお取計ひ遊ばして下さいまし、私、夫れで無くつて

は何を見ても面白いとは思ひません」

「夫は察して居ます、けれど谷口君の敵がまだ十分に警戒を加へて居るですからな、

茲で貴女が再び谷口君の家へお歸りになるやうな事があれば、彼等は又谷口君に向つ

て、何んな鋒頭を向けるかも知れないですから——もう少しの辛抱です、貴女は飽までも私の妻の如くなすつて、さうして彼等に油断をお爲せなさるのが必要です」

「けれども、私」と花江は云ひ難さうにして「何日までもお宅で御厄介に爲つて居るのは辛くもありませんし、餘り長くなりましては、良人に何んな疑ひを受けるかも知れませんので……夫れで……實は……」と苦しき面地「到底急に歸ることが出来なければ、寧ろ實家へ引き取つて、父に相談しやうかと……」

「不可せん、貴女が今そんな事を爲すつては、萬事が水の泡になつて了ふ、夫よりは花ちゃん、どうです、僕の妻に爲りませんか、貴女が私の家へお來になつたら、もう彼是三箇月を経て居る、夫れで私の友人、私の親戚、私の出入の者皆貴女を私の妻と思つて居る、健吉君に比べては多少學問の經歷こそ淺いですが世を渡る上に就いては、多くの苦酸を嘗めて居るですから、實女に御不自由をお爲せ申すやうな事はない心です」

「まア」と花江は憫れた様「御申越はつかし……」

「いや、申越はありませんが、私は貴女が爾う御覺悟なすつた方が、健吉君のお爲で

あらうと思つてお勤めするのです、こゝで貴女が私と結婚なすつて下されば、健吉君の敵は、必ず手を引くに相違ないですから」

「だつて貴郎」と花江は心に爪弾きして「そんな事出来無いぢやありませんか」

「出来無くはない。要り貴女のお心に有る事です、花ちゃん、貴女も好い加減に健吉君を思ひ切つて私の眞切に御同情下すつても好いぢやありませんか、桃園に義を結ぶ例もありますから、今日はこゝの梅の林で、貴女と夫婦の約を結ばうぢやありませんか」

(四十二)

梅は歳々の時を違へず咲いても、龍子の運の開く時は無かつた、彼女の衣服は見る影も無く散れても、着換を與へて呉れる者は無く、彼女の髪は蒨藻の如く亂れても、梳いて呉れる人は無い、彼女の肉は瘦せるに任され、彼女の血は涸れるに任されて居る唯この艱難の間にありても、お菊は變り無く忠義を盡して居る、日々の飢を凌ぐだけは、辛うじて自分の親の内から貰つて來て兎も角も二人の口を養つて居る、年は弱く

教育とても無いに、誰か教へてこんな優しい行ひを爲るだらうとは、一般の人から異み思はるゝ程であつた。

「お嬢様、氣を確乎に遊ばせ、もしお嬢様お嬢様」とお菊は泣き聲で龍子の身體に縋り附くのであつた。

龍子は醍醐の梅林を出放れやうとする野の道に、行き倒れて苦んで居る、此處の梅の清い聲りを友として、今日半日を楽しく送らうと思ひ附いて、お菊と共に來かけたのが、家を出てからの艱難——精神に艱難は覚えぬまでも——身體に受けた激變の爲に憐れ症を作したのであつた。

「お嬢様、お嬢様」とお菊は念あるくして「何う致しませう、お薬でもお買ひ申しませうか」乞丐よりも劣つたお嬢様が、又一人有るであらうか。

龍子は苦しうに胸を押へて「心配爲なくとも好いよ、私は此を待つて居た、私の力で世界中の婦人を呪ひ殺す事が出来れば、私が情も無く血も無く涙も無い男盗人の爲に、呪ひ殺されるであらうとは兼ての覺悟であつた、私の病氣を治す薬はあつても、私の心を治す薬は無し、こんな世の中に活て居るのを苦痛と信じて居る私は、死ぬる

のが本望です、お前も歎んでお呉れ、私の胸の此の苦しきは、私の身體から魂が離れるのよ」

「だつてお嬢様」とお菊は前後を見廻して「其處等に寝ませて呉れる家は無いでございませうか」

「いえ、私は此處で澤山よ、疊を敷いた座敷よりも、私の爲には此の草の褥の方が何んなに好いかも知れない、人の情に濡れぬ袖はあるが、草の露に濡れぬ袂は無い、私はこれが嬉しいのよ」

「お嬢様、貴女は何故そんな……」とお菊が恨めしげに云ひ掛る時、こゝへ來掛つて歩を止めた男があつた。

「何うしたく」と心切に云つて「病氣かそいつは困つたな」

「貴郎、お薬のお持合せはございませんか、お嬢様、急にお悪くなりましたので……」とお菊は取敢ず救ひを求めた。

彼の男は近寄つて龍子の面を洗と見て居たが「ヤツ、貴女は南小路さんぢや無いか」龍子は細ら眼を開いて「あッ、爾う被仰るのは、谷口様でございませうか」

健吉も今日の長閑さを醍醐の梅に暮らさうとしたのであつた。

「是れは可けませんな」と健吉は氣を揉んで「こんな處では何うする事も出来ん、お前さん仲を呼んで来て下さい、何處でも好いから醫者の家へお伴れ申す」

「はい」とお菊は喜んで、元來の方へ駆け出さうとした。

龍子は苦しい中から「あア仲には及ばないよ、お菊、私を苦めちや可けないよ、私の望みを妨げちや可け無しよ」

「だつてお嬢様」

「いえ、何處へも行つてお呉れで無い、私もう死ぬんだからね」

(四十三)

健吉の心切に頼つて、仲を呼びに行きたいのは山々であるけれど、龍子の詞を反古にする事は能きぬ、お菊は二三踏み出して再び後へ引き返したが「お嬢様、何故でございます」と涙聲。

健吉は又口を添へて「龍さん、貴女そんな言を被仰つちや可かん、私も又貴女の友

人として、貴女を此處で見殺しにする事は出来無い、殊にお召使も大さう心配して居る様です、醫者の手に掛るのがお厭なれば私の家へお來なさい、及ばすながらお世話を致します」

「いえ」と龍子は頑固にも頭を掉つて「私は私の不心得から、親の財産を無くなし大罪人でございます、斯うして野たれ死をするのは、自然の結果、自然の報いでございませう、どうか決してお關ひ遊ばさないうやうに……私は貴郎が私の家來の如く、私の他の友達の如く、總の世間の人の如く、私を冷酷にお扱ひ下さる事を歡びます、私は貴郎が、私を友人と被仰つて下さつた、只今のお詞に満足して死にます、私世界の婦人、世界の萬物に對しては、氷よりも冷たい心を有て居りますけれど、只貴郎ばかりには、多少の温かい情が残つて居ります、私は貴郎の御心切を歡びます、貴郎の御心切を身に占めて永き眠りに就きます」と云ふ中に聲は段々細り行くのであつた。

健吉は悵然として天を仰いだ、天は蒼く澄み渡つて、初霞麗かに彩つて居るけれど、龍子の思ひを包みさうには見えぬ、お菊は只あろくして、

「何う致しませう〜」

此の時、袖に袂に梅の香を泌ませて、此方へ來掛けたのは、筆村正也と健吉の妻の花江とであつた、花江は目敏くも健吉の姿を見て、

「あッ、旦那か」と呼ぶと共に、懐しく其の側へ駆け寄らうとした。

「これ」と正也は行頭を遮つて「彼は谷口君です」

「はい、私の……」

「今は貴女の御主人ぢや無い、まア沈としてお在なさい」

「いえ、夫れでも私……」と花江はハラハラおちる涙の中より、悲しう聲を發すのであつた。

此聲を健吉は耳に挟んで、見るとも無く見返つたが、若き男に伴れられた花江の姿――

「思ひ切つて離縁した妻ではあるが、まだ念頭を去り難ねた花江の姿――」目見ると共に、眼の色は血走つて、つかく側へ歩み寄らうとしたが、又思ひ返す處があつて

か、再び龍子の側へ歸つた。

花江は悲しう「ぢや私、お側へも參られなうのでござりまするか」

「貴女が行つちや悪い、谷口君の側には貴女の敵の南小路さんが居るんです」

「えッ龍子さんが……」と花江の顔はさつと變つた。

「だから貴女は御遠慮なさるが宜しい、谷口君と南小路さんと、何ういふ關係が生きて居るかも知れなう」

花江は遂に面を掩うて泣き出した、彼女の心は何のやうであつたらう。

健吉はお菊の耳に囁いて「僕は一走りに醫者を呼んで來る、お前さん氣を附けて居なければ可けなう」

「はい、どうか宜しくお願ひ申します」とお菊は此の場に、大きな芝居の舞臺が活現せられたに心附かぬ。

健吉は花江の方を振り向きもせず足早に立ち去つた、其の後姿の見えぬやうになつた。

た頃、正也は泣き入る花江を促しつゝ、龍子の側を通り抜けて、挨拶もせず行き過ぎた。

正也と花江とが通り過ぎると間も無く、かやくと女の囀る聲がして、五六人の媚いた同勢が、九死一生になつて居る龍子の枕頭を歩み去つた、お菊は癖み心に、此等の人恨めしう、眼を白うして視上げると、見覚えのある佐久間次郎が、舞妓と藝妓とに手を引かれて、微酔機嫌で行くのであつた。

「あア、佐久間さん」と口まで出たが、お嬢様のこんなお姿を見せるのは、お嬢様の恥であると思ひ返して、見ぬ面をして垂頭いた、次郎も自分の以前の戀人がこんな處に行き倒れて居やうとは思はぬから、是れも氣が附かずに過ぎ去つた。後は冷い風が、習々とお菊の涙を吹くばかりで、暫く行人の歩も絶えた。待ちに待つ健吉はまだ歸つて來ぬ、すると又背後に人の氣色がして、

「眞個に口惜しいつてよ、お母さん、何うしやうねえ」と云つた聲に聞き覚えがある振り返つて見ると、思ひ掛けも無く、そよ子と其の母のお松とが、面には化粧身には綺羅を着飾つて、然も面白からぬ様、肩を併べて話しながら來るのであつた。健吉の歸りを待ち疲んで居たお菊は、この有縁の人を見て、飛び立つやうに思ふのであつた、お松母子が龍子に對する不心切は兼てより知らぬでは無いけれど、佐久間次

郎などは異つて、他ならぬ人であるからお嬢様の此のお姿を見ては、知らぬ顔もして居るまいと思つたから、此方から聲掛けて、

「そよ子さんやありませんか」と呼び止めた。そよ子は呼ばれて振り返つた、其の眼の色は嫉妬の火に紅く燃えて居る。

「あゝ」と至極冷淡に「お菊どん、何して居るの」お松も立ち止つて「お菊どんか、好い陽氣になつたねえ」と云ひ捨て、行き過ぎやうとする。

お菊は慌て、「お乳母どん、一寸待つて下さいよ、お嬢様が……こ、こ、此處にお在で遊ばすんで……」

「えッ」とそよ子は目を圓うして「お嬢様が……まア」と身を縮めた。お松はつかつかと側へ寄つて、病に難む龍子の姿を沈と見たが「まアお不憫さうに……恰で乞食の行倒だねえ」

お菊は直にその詞に絶つて「私、どうしやうかと思つて途方に哭れて居るのですわ、お乳母どん後生ですから、暫く……」

そよ子は是れに耳を貸さうとせせず「ちよいとくお菊どん、今こゝを佐久間さんが通らなかつて」

「佐久間さん、五六人もお女中をお伴れなすつて、たつた今お越しになりました」

「さう、夫れちやまだ遠くへは行くまいね」

「まだ五六町でございませう」

「夫れちや追附かれるわ、お母さん早く行きませうね」

「あア」とお松も頷いて「お菊どん、左様なら」

「あらお乳母どん、そんな事を云はないでお嬢様を些とでも御介抱なすつて……」

「え、其處どころちや無いんだよ」とそよ子は龍子の上を見返りざま、くわつと痰を吐きかけた、次郎に對する腹立を、仿無くもこゝへ移すのであつた。

お松は冷かに「お不憫さうだねえ」

と云ひ捨て、二人は急ぎ足を去つた。

お菊が熱い涙を注いで、怨めしげに二人の後姿を見送る時、彼方の葭簾茶屋の中から現はれた背の高い、外套を着た男は、お松母子を見失はじと爲るやうに蹠を追うた

其の後へ何處から来たとも無く現れて、物をも云はず、龍子を抱き上げた男があつた。
「お嬢様、お懐しうございませう」
お菊は驚いて、誰かと見ると、救ひの神が今來たのだ、これは前に姿を隠した忠義者の金次郎であつた。

(四十五)

夫れより三時間の後には、龍子の病軀が洛北山端の只ある農家の奥座敷に横へられて、あつた、此處は南小路家を退隠してから、金次郎が起伏の室にと借り受けて置いた家である。

龍子の病氣は、神経衰弱から心臓に故障を生じたことと云ふことで、醫師はまづ九死一生の大患であると告げた、お菊の心配、金次郎の苦勞、宛ら水を打つたやうな病室に、二人は心配の眉を寄せて、人間の力には及ぶまじき主の運命を悲しむのであつた。

其の間にも金次郎は、龍子の大病を悲しむ以外、更に何かの大なる苦勞あるが如く、絶えず頭を垂れて、太息を吐いて居た、彼れの心に何んな物思ひが宿つて居るかは

神様の他御存じは無いであらう。

日の漸ら暮れかけた頃、夢現の境に居た龍子は重い枕を握りながら「お菊、お菊」と呼ぶのであつた。

お菊は「はい」と摩り寄つて「あのお薬を差し上げませうか」

「私、まだ生きて居るのかねえ」

「お嬢様、何を被仰るのでございますよ、此處は金次郎様のお住居で、貴女は金次郎様の温い御介抱を受けて在らつしやいます、今夜か明日の朝は、谷口様もお見舞に來らつしやる筈でございますから、夫れまでにお薬を召上つて、元のお達者なお身體にお爲り遊ばさねばなりませんよ」と耳の根に口を寄せて云ひ聞けた。

龍子は苦しげに詞を續けて「私、元の身體に爲らうとは思はない、金次郎の世話を受けて、病氣を治く成らうとも思はない、私の運命は決して居る、私はもう世界の總てに見放されて、是れから遠い旅へ行く身です、夫れで現世の望みに——どうかして花江様にお逢ひ申したい、金次郎に相談して花江様をお招きする事は能きんだらうかねえ、お前、善く金次郎に頼んでお呉れよ」

「はい」と心得てお菊が後を振り向く時、金次郎は膝を進めて、龍子の面を心細げにさし覗いた。

「お嬢様、お目覚めで在らつしやいますか、私は金次郎でございます、お嬢様のお心に倅つた金次郎でございます、此處を私の借りて居る座敷と思召しては爲りません、假しお薬一服たりとも、私の手でお嬢様のお世話致すのではございません、お嬢様をこんなお身にお爲せ申したのは、私の妻、私の娘の所爲でございます、私はどうしてお詫を申して好いか、詞の無いのに當惑致します、こゝはお嬢様をお迎へ申す爲の座敷、私はお嬢様の今日をお慰め申す爲に、生きて居たのでございます、殊にはお薬、お食事及び其の他の御調度も、私が差し上げるのでは無く、皆お嬢様の物でございます、お嬢様の物をお嬢様が召し上げるのでございますから、些とも御遠慮は要りません、どうか一日も早く、一刻も早く快くお爲り遊ばして、御家名をお立て下さいまし、そ、夫れが私の……」

「金次郎、金次郎」と龍子は慄ひ聲で呼んで「私、もう何んにも聞く事は無い、私の望みは、只花江様にお逢ひ申したいのだから、早くお呼び申してお呉れ、考へて見る

「私は恐ろしい悪魔の化身であつたわねえ」
「へえ宜しうございます、花江様のお住居も私は能く心得て居るのでございます」

(四十六)

龍子が金次郎の爲に救はれて、山端の農家へ入つ頃、そよ子とお松とは次郎の行方を探りめぐりみて、六角堂の家へ歸つた、日はたつぷりと暮れて、奥の居間には洋燈がぼんやりと點つて居る、そよ子は嫉妬に胸ふくれて物食べやうとする氣色もない、
「何處へ行たのでせうねえ、那な人つちやありやしないわ」と薄い唇から唾を吐いて云つた、

「お遊びなさるのも好いけれど、人間には程と云ふが有るからねえ」とお松も力無く云つて、夫れに自分は些ともお金儲をしないで、家の物ばかりお使ひなさるから、私末の末が案じられるの」
「だつてお母さんが銀行の通ひ帳をお渡しなさるから悪いわ、もう大分費消つたでせう」

「僅三月許りの間に、五六千圓も無くしたといふから、今の間に何うか爲無いや切角苦勞して築いた家の基礎が、必然傾れて了ふだらうと思つて、私夜の目も寝られない、……寧ろ離縁して了はうぢやないか」とお松は恐ろしい相談を持ち掛けた、

「だけども」とそよ子はまだ未練があるらしく「そんな事も能きなくつてよ」

「ぢやアお前は此處の家を滅ぼさうといふ悪魔に加擔するのだね」

「いゝえ、爾うぢやありませんけれど、彼人はお母様が貰つて下すつたぢやありませんか」

「假令誰が貰つても、家に災する悪魔を置いては置かれませんが、お前、思ひ切つてお了ひが善うござんすよ」

「だつて、だつてお母さん」

「お前、次郎さんのやうな人に未練があるのかい、那な藝者狂ひをして、二日も三日も家へ歸らないやうな薄情漢を、一生良人に持つ氣かい、世界に男が無いものではあるまいし、離縁と極れば些とでも早いのが好うござんすよ」とお松は思ひ切つて云つて「夫れともお前に夫丈けの覺悟が能きのないのかね」

そよ子は遂に黙して下つた、嫉妬の炎に身を焼かれては、大事の良人を嚙んで捨てる如くに云へど、扱離縁を断行すると爲ると流石に未練の出ぬでもなかつた。

お松は此れ程結局の見えすいた問題に、そよ子の躊躇決し難ねるのか、如何にしても不平で堪らぬ、一膝揺て「お前は何故そんなだらうねえ」

云ひ掛る時、縁の障子が颯と開いた、お松とそよ子とが驚いて見返ると、何處から潜ひ込んだのか、頭から外套をすつぱり被つて、淡墨色の眼鏡を掛けて、右手に二尺五寸もあらうといふ大刀を掲げて雲突くやうな大男がぬツと入つて来た。

是れに驚いて「あれえ」と叫んだそよ子の肩頭は忽ちばらりと切り下られた、その血煙の中に腰を抜かして、あたふた匂ひ出さうとするお松は、憐れにも脊骨から脇腹を切り付けられて、其の場に挫と倒れ伏した、

この物音に驚いて、下女と小間使とが駆け付けた時、もう曲者の姿は無かつた、抑も誰の所爲であらう。

(四十七)

夜は深くて高野川の水の音只獨り高く聞え比叡山おろし颯と吹いて、時は梅の春なれど夜着の拾冷たく、龍子は苦しうに幾度か寝返り打ちて、豆の如き行燈の火を心細く見上げながら、

「金次郎は」と淋しう問ふ。

お菊は此の時もまだ枕頭に坐つて、主の病を看護するのであつた。

「まだ、お歸りになりません、然し御心配遊ばしますな、もう程無くお歸りでございませう」

「大層遅いのねえ、先刻十二時を打つたぢや無いか」

「けれど花江様のお宅まで、一里半もあるつて申しますからわ」

「おや、那樣にあるのかねえ」と龍子は長い夢の今覺めたやうに「私の心得違ひから皆に苦勞を掛けるのねえ」

「いゝえ何う致しまして」とお菊は龍子の心を察し遣りて「お嬢様がお悪いのはございませぬ、是れも成行でございますわ、世の中が悪いのございますわ」

「爾らぢや無い、私は今夢が覺めた、斯ういふ世の中で幸福に身を終らうとするには

自分の思ふ通りにしやうと爲る我を折つて了はなければ爲らなうつて云ふ事……私
は始から浮世の態を過つてよ、浮世は私のやうに正直では無かつたのねえ、私のや
うに清く正しいのでは無かつたのねえ」

「どうも難しいものですねえ」とお菊は更に逆はぬ。

「然し私はまだ幸福よ、家や名譽——眞の名譽ぢや無かつたも知れないけれど——兎
も角も身に着いたものを全然無くなしながら、お前の心切な介抱を受けて居たのは、
他人で眞似の能きぬ幸福であつたのよ、夫れで私に比べると、花江様は不幸だわ、始
は羨ましい程お幸福であつたけれど、今ぢや乞巧見たいな私よりも不幸で在らつしや
る、……あア、金次郎はまだ歸らないのかねえ」

「いえ、只今歸りました」

云ふ聲突然と縁の外に聞えて、金次郎は例の入口とは異つた、前裁の縁側から入つて
來た、お菊は其の態を一目見て、面の色の常ならず變つて居るのに喫驚したが、龍子
は少しも心附かぬ。

「金次郎、御苦勞だつたわねえ」と一息ついて「花江様は」

「只今直お越しになります」

金次郎は斯う云ひながら龍子の枕頭近う座を占めた、而して正面に彼れの顔を照らす
行燈を彼方へ向けた。

「爾う、花江様必然御出で下さるのだね」

「假令遅くとも、御入來にならぬ筈はございませぬ」

「嬉しいことね、花江様にお目に掛れば、私も思ひ置く事無しのだわ」

龍子はいかにも満足の體であつた。金次郎は一膝搦て、

「お嬢様、私は花江様のお越し遊ばすまでに、申し上げて置かねばならぬ事がござ
います、誠に恐れ入りまするが、どうかお耳をお貸し下さいまし、私は先年來、お
嬢様の御機嫌を損ねて居りますので、今一大事を申し上げるに就ても、もしか叱りを
受けは爲ないかと、唯夫れを心配致すのでございませぬ」

龍子は溢るゝばかりの涙を夜着の袴で拭いて「金次郎堪忍してお呉れ、私はお前を過
つて居た、お前の忠義を見損つて居た、どんな事でも聞くから、遠慮無く云つてお呉れ」
「あア、お嬢様」と金次郎はハラ／＼と涙を流して「其のお詞を承つて、私思ひ

置く事はございませぬ、夫れでは仔細にお話し申します」と云つて立ち上つて、地袋の中から方一尺ほどあるうといふ鐵の箱を取り出した。

(四十八)

金次郎は其の鐵の箱を龍子の枕頭に置いた、龍子は苦しげに息を凝らすのである。「お嬢様、こゝに鐵の箱がございます、此の中には私一代の忠魂と、南小路のお家のお命とが納れてあります、お嬢様、私は貴女の爲に蛇蝎の如く思ひ嫌はれて居りましたが、私は貴女のお家を忘れる時は無いのでございました、貴女のお家に仇をする、私の妻、私の娘を惡魔の如く見て居りました、けれどお嬢様、私の性質は——優柔不斷の私の性質は——思ひ切つて惡魔を斬るだけの決心が出来ませんでございました、私はお嬢様に對して、唯是れだけお詫を致します、もしも私に大英斷を行ふ勇氣がありましたら、お嬢様を此の様なお妾には致しません、南小路のお家を惡人共の脚の底に穢させは致しませんけれどもお嬢様、私は辛うじてお家の命を取り止めました、南小路家は決して斷絶したのぢやございませぬ、お家の財産の八

九分までは、此鐵の箱に入つて居ります、銀行の預金は一時取り出して、私の手で他の銀行へ預け入れてあります、お家の不動産全部は、私の手で一番二番三番までの抵當に入れてあります、これは私の妻娘が、怨の火に焼き盡さうとする形跡がありましたので密に取り計らつた私の苦肉の計畫でございます、是等の財産悉皆は、今日改めて貴女の手へお渡し致しますから、どうかお受取りを願ひます、而して改めて申し上げて置きますのは、もう現世にお嬢様を苦める惡魔は居りません、お嬢様に痰を吐き掛けた獸類は、私が制裁を加へて遣りました」

金次郎の詞は言々悉血であつた、言々悉涙であつた、行燈は只爛々と、お菊は垂頭いて聞いて居た。此の時様の障子が煽と開いた、健吉が訪ねて來たのである。「お、谷口様」と金次郎は歡んで「まア何うか此方へお來下さいまし、お嬢様も少はお宜しいやうでございます」

「どうか、夫れは嬉しいね」健吉は龍子の枕頭に坐つた。「お嬢様」と金次郎は龍子の面をさし覗いて「谷口様が來らつしやいましたよ」

龍子は夜着の衿に面を掩うて「私は面目無くつて、お目に掛る事は能きない、お前か
ら好く……」

「龍ちゃん、貴女そんな遠慮をしちや可けないよ、貴女と私とは互の両親が生きて
居る頃から交際しやないか、少しも早く快くなつて、岸澤さんの忠節を無にしな
やうに爲さるねばならん、私今この縁外で岸澤さんの真心を立ち聞きして、思はず不
覺の涙にくれた、私も及ばずながらお力を添へるから、もう一度快くならうといふ氣
が無くちや可けないよ」

「谷口様、善く被仰つて下さいました、貴郎の一刻の御介抱が、お嬢様の爲には、日
本一のお醫者様のお薬よりも熱く聞きませう、お聞きなすつたとあれば改めては申し
ません、私も貴郎にお頼み申して置けば安心して行かれます、御存じの通り、頼り
少いお嬢様でございますから、萬事お力をお添へ爲すつて下さいますし、金次郎が一生
のお願ひでございます」

花 夜 又 終

明治三十九年三月二十日印刷

花夜又典附

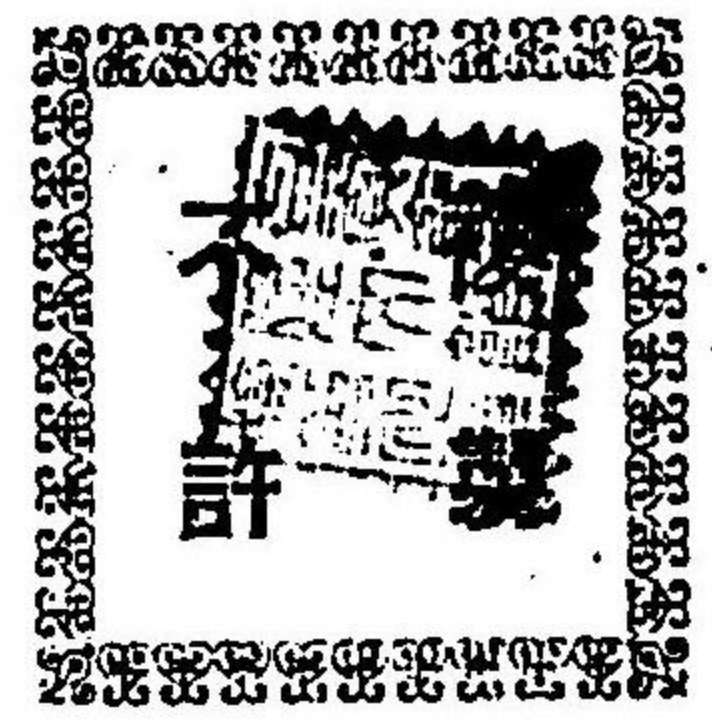
明治三十九年三月廿五日發行

《定價金參拾五錢》

編輯兼 發行者 平 山 勝 熊
東京市京橋區尾張町一丁目一番地

印刷者 武 廣 利 雄
東京市京橋區宗十郎町十五番地

印刷者 株式會社 國 文 社
東京市京橋區宗十郎町十五番地



發 兌 元
東京市京橋區 尾張町一丁目 合資會社 隆 文 館
賣 捌 所
全國各地書肆雜誌店

德田秋聲君新作 口繪 鏑木清方君畫

血薔薇

總クローヌ製美本
定價 金六十五錢
郵税 金八錢

行く春 滿腔の怨恨醫さんと欲するも能はず徐かに垣に倚って行雲の白きを
仰げば何者の哀音か、曲は長く引きて、脈々たる暗香袂を掠むるを、醒
めたる如く頭を廻らして、手折るや一輪の紅薔薇、露はうとこぼれて、艶なる
が、又凄絶骨を刺すの趣あり、血か花か、情は燃ゆる青春の紅花涙に褪
せてまた見るべからず、吁々。秋聲君常に幽遠の詩趣と深玄の哲理とをか
ね巧みに一種の人生觀を寓して才筆人の肺腑を衝くものあり、本篇蓋し
又天下の士女に人情の好教訓を頒つもの也

大塚楠緒子女史著 新海竹太郎君意匠

晴小袖

洋装新式製本
金文字金縁
定價 金八拾錢
郵税金 八錢

一葉逝き、薄氷去りて世は等しく、閨秀文壇の寂寥を告ぐるうちに、獨り
大塚楠緒子女史あり、才學高く諸流を抜き、加ふるに泰西の文學に
通じ、造詣甚だ深きものあり、早く既に艶麗なる筆に、精緻の想を舒ぎ、
一たび之に接すれば、春風面に温かに、秋月頭に清く、時に綿々の情緒
人をして憂へしめ、時に惻々の哀音人をして泣かしむ。「晴小袖」一卷女
史か筐底より出で、金釵にはあらぬ一擲、憂として文壇初めて聲あり、
蓋し近時閨秀文壇の珍として江湖の喝采を呼ぶこと疑なからん。

菊池幽芳君著
鏞木清方君畫

賣花娘

新式製美本
定價金五拾錢
郵税金八錢

精緻の構想、艷麗の筆致、奇を弄せずして自ら巧かに、人情の機微を描きて、惻々人を動かさずんば止まず、一篇又一篇、いよいよ出て、いよいよ天下の文壇を驚動せしむるものは、我が關西文壇の老驍菊池幽芳君にあらざるや。賣花娘」一卷その名既に可憐なり、焉んぞ氏が獨特の好題目ならずして何ぞ、花や花、召しませ花の糸櫻、都大路の朝風や、塵にも染まらぬ優しさ、人知るもむか、試みに此の可憐の少女にかはりて涙ある人の清鑑をまつ。

發兌元 東市京橋區張一丁目一丁目 隆文館 電話番八六五二番

新刊 草村北星君著

露子夫人

全一册

總クローズ金銀刷
體裁極めて優美
定價金七拾五錢
郵税小包料金拾錢

露子は萬難な戀愛の希望を全司馬の夫人となれり斯くて一理想の夢は運好くも聚の意氣ある懸は己を露子の爲に父母は涙な愛女の行幸多かれと祈り理想は竟に現實にあり戀愛の自由を希ひ得たる理想の人にして今は現實の絆に苦む身となり世間の戀は美し理想の夢に非ざれば幾多泣く悲痛事の身圍繞して過きし方なき戀し辛父母の斯く戀はる束縛にて好み自由の人となる露子は却て自縛の苦境に入り讀み來母に瞑想す人生無限の恨事、倅や柱に極る青春戀を思露子めの一掬全情の涙を瀧がむ宜しく自家戀愛の考慮に資し可也 (九月上旬發兌)

のために 半宵一掬の涙を吝まらぬ熱血と同情ある士女

隆文館 電話番八六五二番

す み 子

草村北星君著

一た秋雨半宵の後に、春風一日の花何恨惆とかならん。短檠
 佳人居長暗愁の眉を閉かす、あ惨風や酷雨や。澄子は玲瓏珠
 貞婦の時太郎は煥發花の才子なり。節操に力め、意氣に振ふ。
 奸婦の情事、猛は
 郎の全篇、暗
 闘る益し、来ては
 一幅の活悲
 劇は、情れいへき
 主人公が奮めに
 奔放豪逸の調を以て、恍惚夢寐の情を穿
 動哭らしめずんば、湘南の濱、荻露芒風に涙佳人何ぞ熱烈なる世
 の同情者来つて、可憐な澄子が清夜一刻の女下



宮川春汀君畫

▲クロイヌ製美本全一冊
 ▲定価金六十錢 ▲郵税金六錢
 新筆者代の當り、のあ、唏氣に振ふ、すかる、の如、か、

露子夫人前篇

草村北星君作 繪木版四十度美人宮川春汀君畫

相思怨

小説 新作
 相思うて相違ふ能はず、愁心縷の如く幽情環に似たり。人生の煩累も、
 すに由なく、深闊の相處あり、多し。江山多恨の青年馬、胸裡切々の思
 懐を如何に、意に相傳へて、喜月雁聲、再會の期を、何れに、思
 なく、木理相、意に相傳へて、喜月雁聲、再會の期を、何れに、思
 怨を、た、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 淡を、た、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 来り、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 嗚る、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 世間、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 人に、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 手に、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 き愛、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 て、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 乞、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 司、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思
 焰、寄、草、木、理、相、意、に、相、傳、へ、て、喜、月、雁、聲、再、會、の、期、を、何、れ、に、思



(版六第評好大)

製本體裁極優美
 クロイヌ金銀刷
 定價七十五錢
 郵税金八錢

廣津柳浪君新作●口繪鍋木清方君畫

仇と仇

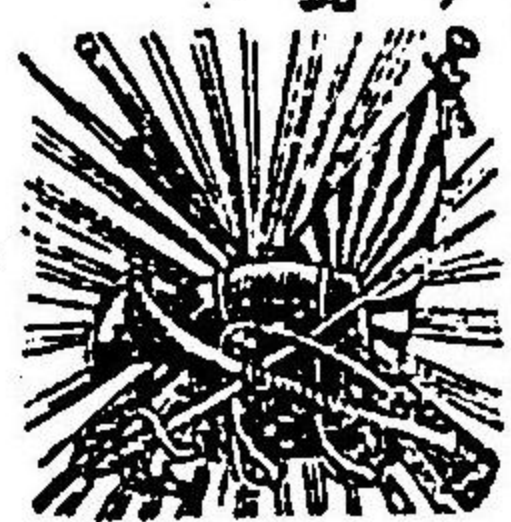
前篇 定價各七拾錢
後篇 郵稅各八錢

此れ文壇の巨匠廣津柳浪氏が百練の後になり一大傑作なり、氏の文簡拔でし瘦艶、氏の想奇警にし清新な更に云ふまでも此の編趣向萬千、波浪重疊人をし應接に暇あらさう忽ち孤を托する忠臣りとな忽ち國を傾る妖姬なる春や紫の曙金殿の酒暖る時、毒蛇の鱗飛て盃上を廻り、秋の寐覺の衾冷なる所、銃聲一發爆として紅閨の曉を破る、丈夫の心底何れ雄にし美人草根底爲ぞ然く悽しき。作者狡猾の手腕巧に這裏の情趣を描き雄大と凄艶と併て一篇の間に收む、已に、作者得意の境、得意の筆、滔々として江河の決が如く、崎嶇として深壑の廻が如し、未だ之を讀して柳浪氏を語るべか未だ之を見ずし小説を談すべか

小栗風葉君著●松岡輝夫君畫

小説 美丈夫

出入の幾度強國の強亡國の慘、俠人の俠麗人の麗は、風葉氏の筆に依りて、具さに其致箇快男兒の鬚眉火は、一代の靈筆に盡さざるはなくこの活躍せしむるは止まず、織巧かにし意氣め、雄はしめ、活躍せしむるは止まず、織巧緻細の文學の時、新建國、新理想の日本男兒を導れんとす、るもの、必ず之を此の標に求めよ。



東海 名國あり、其義に
勇てん 俠を愛し、
驍猛精悍 宇内に冠
絶す、わ 美丈夫は 劔俠なり、
の 眞粹なり 白玉の 覺臥 蠶の眉
氣宇卓落として 千古を 驚し 眼、千載を
絶て 經綸の才 饒かなり、劔に 杖て 中亞の 月に
嘯や、一臂 衰亡に 乘ん 亡國を 扶け 單身は 千斤の
しめ、泉 娜花の 如 少女の 意氣に 孤劔 萬虎の 境

前編 洋布製 定價各六拾錢
後編 洋布製 定價各六拾錢
郵稅各八錢

江見水蔭君新著
海賊の子

口繪 宮川春汀君畫 体裁 總クロニス金銀文字模様入願る美本

極北に一土あり樹大と名づく、今や時勢風漸くその上に繁からんとして、萬人の脚一に之の時、**著者水蔭氏**に歸りて、**豪快**なる**大雄篇**を、**海賊の子**、**意氣冲天**の勢に、**破天荒**の老將軍に、**剛強壯快**の鋭は、**獐**猛なる快水夫に見る、**窈窕麗人**、**薄命の俠美人**、**落葩流**水の麗を添ふるに至つて、**奔放**は天馬の空を、**纏綿**は芙蓉の雨に、**拔**山翻海の風浪を、**彩華艶麗**の花園を見るに、**著者獨壇の海洋文學**の粹、**並に極まるものと稱すべき乎**、願ひて、**文壇稀有の大雄篇**を、其の文の、**清新**にして、**瀟灑**、**流暢**にして、**詩趣**あふる、あるを、**詩人**一を、**満腔の抱負**、**虹霓の意氣**、**天空**に向て吹く、**此の畫一**、**文壇**の**顔色**なからん。

前編 定價金七拾五錢 郵税金八錢

橋本埋木庵君著
鏑木清方君畫

歌吉心中

前篇 定價各四十五錢
後篇 郵税金各六錢

狭なり、血なり、涙なり、情なり、
「身はうき川の浮き沈み、流れのまゝに糸竹の節しげき
世を今更に、弱き運命を趁ふとも、染まぬ蓮の露の珠
清き心もうばたまの心の闇に消されては、あはれ短か
きえにしぞと、とる手とる手に瀧津瀬の、涙の雨こそせ
つなけれ」
「歌吉心中」聞くだに悲しき文字の、願はくば讀者に一掬
の涙をこそ。

發兌元 東京市京橋區 合資 隆文館
尾張町一丁目

田口掬汀君著 ● 鏑木清方君畫

沈痛凄麗なる文字、清醇にして純潔なる着想を彩るものは、抑も穩健にして優艶な眼を明治の思想に矛盾、衝突、融和の深致を描き、悲痛、幽婉な人をして泣かしめ、人をし、獨特の手腕な「情の人」は、苦心の傑作を撰びたるものにして、悦ましむるは、抑も、玲瓏として、明月の白雲に映するの感あり、夫れ現代の藝術を、燦爛する如く、文界に思ふる所は、一に教訓を説かんとして、悉く、藝術を

忽再版
情の人

全一冊 願美本
定價 六十五錢
郵税 八錢

れ、他は藝術と人心を顧るに疎なる處にあらずや。今、清健の優麗の文、以て人を樂ましむるに力む、其の異才の天下に鳴るものにして、徒爾な藝術道徳の兩者に涉らざるなり、而して、氏の從來の作多からず、なまじく、益美何ぞ一本を購ふて、清趣は、ざる。思

加藤眠柳君作 ● 口繪宮川春汀君畫

新刊 **家庭水彩色**

新形洋装 願美本
約 三五百頁
定價 六十五錢
郵税 八錢

色界波瀾く、人生の妙趣、青春は罪なる、千古の麗人たる幸なる、抑も多情、多情の愁人は、何の憂ひぞ、茲に妙齡花の如き、樂人あり、早く戀の樂知つて、天樂の甘きも、甘き酔ひ、茲に青春の才人あり、暗雲淵の如き、失戀の境に呻吟す。成は破れ、離れ、遭ふ、人生障り多く、遭逢必竟、浮萍の如し、然も相逢つ事成の時、麗人、地上の人、嘲哢る、天樂、樂人の圓滿、悲曲を、謠ふ、纏綿の情、倩麗の意、に當今の才人、眠柳氏の彩筆を、藉り、叙し來る。大衍の道、嶮に、人情却り、嶮、義理の柵、情の淵、波瀾湧く、一段の斷腸境、氏が、錦心にて、名残を描き、眞に、近來の一大雄篇、天下の青年子女、讀んで、蜜の如き慰藉を得るも、幾何ぞや。

書圖刊新館文隆

明治式の教訓小説

二十世紀青年女子の好讀本

大好評四版

小説新細君の婚禮卷

黑法師君著 ● 宮川春汀君畫 ▲ 眞個の家庭小説

總クコース製本金銀文字入意匠斬新
定價五拾錢郵稅六錢

牡鶏を獨り飼ひて絶えて牡鶏に交らせぬ結果は冠頭黒く光澤を失ひて遂に盲目となるとぞ。生殖は天授の妙機にして結婚は人の大義なり。東京第一の花と諸は棄てたる燕子が年来の主なる獨身の肩書きを棄てたるは不思議ならぬ。才子の失戀に泣かせてめく世に羽振りよき才子の失戀に泣かせてめく見るからに恐しき雙眼の牛乳配達を夫と結婚の心算すべからざるを教へぬ。戀に泣く人の忽せにすべからざるを教へぬ。戀に泣く得よ。夫を戀ふ人讀みてこれに温かき慰藉を

發行元 東京市橋區尾張一丁目合目會社 隆文館 (電話新二五八六番)

書圖刊新館文隆

病戀愛

德田秋聲君新著 ● 口繪宮川春汀君筆 木版四十度刷極美

全一冊 裝裝頗る斬新 定價金六拾錢 郵稅金六錢

戀する男は愚人の如く戀する女は天使の如しと戀の始は蜜り甘し其終りは膽汁り苦いふ。今秋聲子の新著にして病戀愛といふも戀愛の苦痛と憂愁とはその愉快と幸福より大にして、やゝの人生の光明を蝕し戀する男女を驅つ絶望の淵に墜かしむ暗示ならんやまわれ苦痛の憂愁の裡、なほ且つ喜悅存し寂寞な人生を彩るも戀愛の眞味に非戀愛の遺産は後悔なりと箴言果して千古不磨の眞理なりといひ得。一部の病戀愛は眞の疑惑を解決し餘蘊のなり。人生の花に憶る諸人の必ず讀らざる可書也

發行元 東京市橋區尾張一丁目合目會社 隆文館 (電話新二五八六番)

隆文館新刊圖書

渡邊霞亭君作 ▲夏期的好讀物!!! 家庭小説の白眉

家庭小説 次郎島

全一冊 總シロース 金文字美本 正價七拾錢 郵税金八錢

大好評再版 ●口繪木版四十度刷 宮川春汀君畫

幼で孤りな繼母の手で虐待せらるる何等の悲惨な少女の友愛の情に富み異母兄の業務を助く何等の可憐な途に悪漢に要され誘拐せらるる何等の痛恨事だ齡纔に十有一敢て少女を尋ねて旅程に上る何等の殊勝な這般の勇氣や這般の決心や這般の精神や是れ我國少年凡て者の脈管に流れて止まらざる現はれは好箇の機會なりが著者は關西文壇の雄鎮にして筆致奔放人を動かす力に於て最も富む今如上の事實に想を構へ舞臺を廣く全世界に取り一編の立志譚を化して小説となす興國の氣運に際會せる殊に將來大に爲んとする少年男女及び父母兄弟姉妹は必ず讀まざるべからざるの書也

發兌元 東京市橋區尾張町一丁目 隆文館 合資社

隆文館新刊圖書

文壇近來の傑作

廣津柳浪君新作

宮川春汀君畫 ●口繪木版三版好評

小説をところこ氣

全一冊 製本クロース金銀刷 定價金六十五錢 郵税金八錢

柳浪先生は文界の鉅匠なり、凄慘なる其の筆致、深刻なる其の構想、長く明治文界に其比を絶ちて、著作界の珍となれるもの茲に久し、先生時勢に感ずる所ありて冥想靜思、頃來一篇の著作をなすことと「こ氣」即ち是れ也、其の構想の痕、實かに平生の諸作を抽きて、興趣泉の如く湧き、文情秋の如く悲しきは云ふ迄もなし、殊に筆を現代の思潮に着けて、かの社會主義者を拉し來り、之を文るに人情の轉變、社會の表裏を以てするところ、獨り現代小説中の一異彩たるのみならず、批評家が永く渴仰して、其の顯出を要求しつゝある所謂時代思潮を描寫せる作物として、殆んど幾微に觸るゝに庶幾きものあり、殊に頭卷に置かれたる論文は、以て先生の用意が常に那邊に存するかを見るに足る。即ち茲にこの一篇を捧げて、隨んで廣く天下の批評を求むる所以。

發兌元 東京市橋區尾張町一丁目 隆文館 合資社 (電話二五八六番)

書圖刊新館文隆

小栗風葉君新著

口繪宮川春汀君筆

再版

新作

出來

き

寐

表裝頗る新
定價金五十錢
郵税金六錢

文人悲劇を措か、深刻當に人をして涙に血べからしめざる「うき寐」の一篇、材を狹斜の地に構へ、一點卑猥の境に涉り、却つて思ひ色巷の真相に潜り、悲惨な一娼妓の一生を描寫して、餘なしとる。憂き川竹の流れ偽の里に、却つて誠の戀ある郎の情薄うし紙の如く、之を弄て殆ど至らざる若れ、憐むべき女が、深夜一指を斷て流血淋漓、笑つて絶命の辭を記し來るに至つて、誰か妓女紫の悲命に泣き、作者の筆の鬼氣凄然たる驚かざら其の間意氣あり、張り、達引あり、痴情あり、嬌態あり、或は凄惋或は悲惨、作者の筆は境と相俟つて、姿態百出、長に盡さざるも、若し明治の狹斜文學に一新紀元を劃するもの即ち此の書

館文隆 會合目丁一町張尾區橋京市京東 元兌發 (番六八五二橋新話電)

書圖刊新館文隆

稻岡奴之助君新著

官川春汀君畫

口繪木版四十度刷

再版

海賊大王

金銀摸樣入美本
クローヌ新裝釘
定價金六十五錢
郵税金八錢

云ふ莫れ、戰爭文學に傑作なし、茲に「海賊大王」あり矣、海賊大王は膽大斗の如き日本男兒、之を扶はる妖艶芙蓉を欺く傾國の美人也、對照已に奇なり結構た焉、奇なりや、忽てし鱗鱗千隻、波掀り、風吼え、忽てし砲聲雷の如く、天下殷々、忽てし甲板に銃眼を手する巨大漢、忽てし刀身霜と凝る日本刀、猾露の肝膽爲に寒く、死鯨の如き敵艦蒼波に沈む、蒼天再び麗かに橋頭掲げ出さる日章旗、想を構ふる壯てし偉な已に斯の如きもの況んや著者か得意の筆鋒は、壯に可に、細に可に、織に可に、大に可なる文章情亦た燦爛とし火の如く錦の如し、之を讀ば懦夫起つ猶ほ躍るべ、眞に日本魂の眞粹を發揮し、我國の爲に氣餒を吐く、千萬丈

館文隆 會合社 町張尾區橋京市京東 元兌發 (番六八五二橋新話電)

書圖刊新館文隆

版三ち忽評好大

新作
小説かこひもの

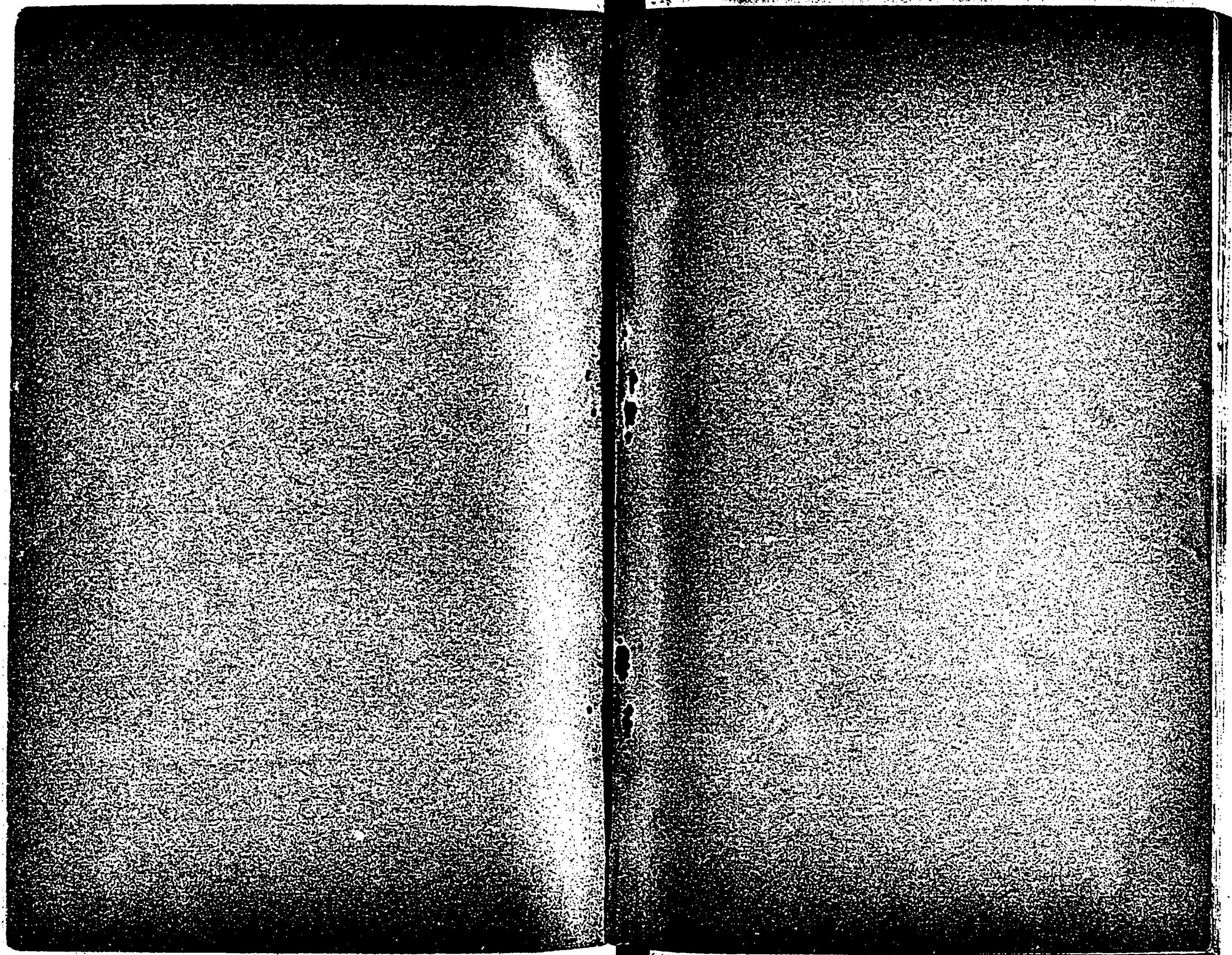
徳田秋聲君新作 ● 口繪木版四十度刷

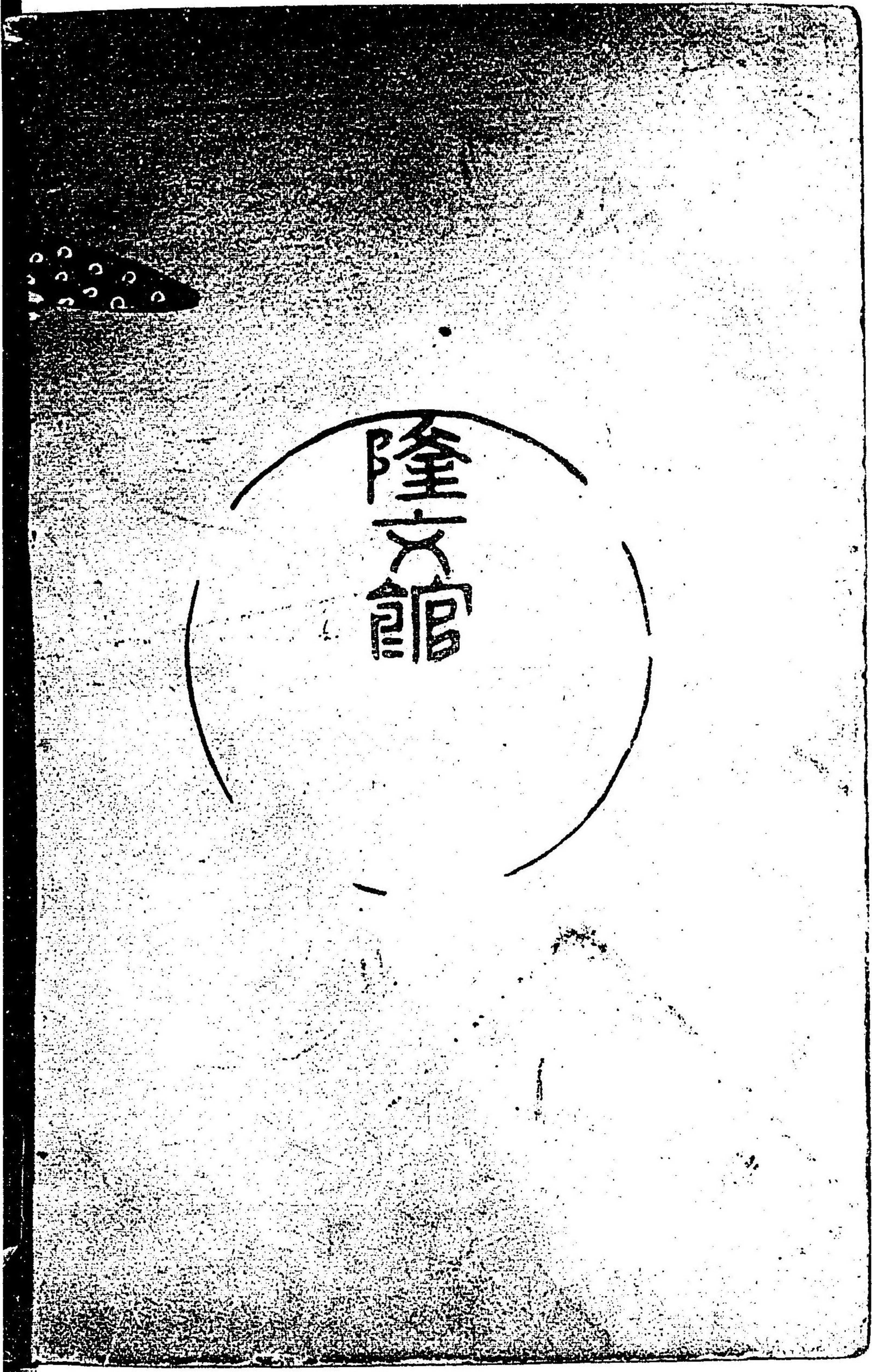
宮川春江君畫

總クローズ金銀文
字模捺入粹麗美裝
定價金六十五錢
郵税金八錢

人生婦女子と爲る已に不幸也況や男尊女卑の似而非道德に規せら東洋に生るに於て飄零落魄旦に愛せり夕に捨る圍ひ者なれるに世人等が汚れたる一面のみを見痛罵らんとす知らず渠等亦人也七情を解して涙ある通常人と異ならず通常人以上哀苦痛苦を抱無言の中無量の血涙熱涙を藏する著者秋聲子は當代の作家中一深刻な人生觀を以て常に弱者の爲に萬斛の涙を濺ぐ人今に得意の材を得想を構ふ彩筆縦横讀者を恍惚しめ遂に子が女性觀に同せんば止とするも固り其所也

館文隆 會合目丁一町張尾區橋京市京東 元兌發
社資 (番六八五二橋新話電)





隆文館